

宮城県文化財調査報告書第228集

宮城県文化財調査報告書第228集

羽場遺跡ほか

羽場遺跡ほか

平成23年5月

平成23年5月

宮城県教育委員会

宮城県教育委員会

羽 場 遺 跡 ほか

序 文

ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、高規格道路の建設や大規模なほ場整備、工業団地造成などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも土地と結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなつたもののうち、平成22年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査の成果と、開発工事に先立って確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成23年5月

宮城県教育委員会

教育長 小林伸一

例　　言

1. 本書は、宮城県が平成22年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当した公共事業等に係る発掘調査報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書に至る一連の作業については、遺跡の重要性から保存を前提とし、遺跡の性格や構成を把握することを目的として文化財保護課が行ったほか、調査原因となった開発行為に係る機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発関係部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。また、報告書作成にあたっては、次の方々からご指導・ご助言をいただいた（五十音順、敬称略）。

安達訓仁（栗原市教育委員会）、佐久間光平（東北歴史博物館）、新野一浩（瑞巖寺）、
柳澤和明（東北歴史博物館）

4. 各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 各遺跡の測量座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
6. 本書で使用した遺跡略号は以下の通りである。
SF：土塁跡 SD：堀跡・溝跡 SX：土取り穴・切石列 SK：土坑 P：柱穴・小穴
7. 土色の記述については、『新版 標準土色帳 1994年度版』（小山・竹原1994）を使用している。
8. 羽場遺跡図版1-1で使用した空中写真は、「国土画像情報（1947年米軍撮影空中写真M321 314CW）国土交通省」を一部加工して転載したものである。
9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て下記のものが執筆・編集した。

平成22年度発掘調査の概要 高橋栄一

羽場遺跡 村上裕次

母子沢遺跡 古田和誠

瑞巖寺境内遺跡 菊地逸夫・村上裕次

浦宿尾田峯貝塚・浦宿C遺跡 菊地逸夫・佐藤貴志

10. 発掘調査の記録や出土遺物については、宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

平成22年度発掘調査の概要

羽場遺跡	1
瑞巖寺境内遺跡	19
母子沢遺跡	29
浦宿尾田峯貝塚・浦宿C遺跡	33
報告書抄録	

平成22年度発掘調査の概要

平成22年度の県内遺跡緊急調査費の国庫補助金（総事業費2,000千円、補助率1/2）による調査は、加美町羽場遺跡、松島町瑞巌寺境内遺跡ほかについて行った。以下、各遺跡の概要等を記す。なお、塩竈市が主体となって実施した母子沢遺跡、女川町が主体となって実施した浦宿尾田峯貝塚・浦宿C遺跡についても掲載している。

羽場遺跡は、古代の城柵跡である国史跡城生柵跡の北～西側に広がる東西約1.1km、南北約1.0mの広大な遺跡である。これまでの踏査により西辺で約550m、北辺で約800mの土壘状の高まりと堀状のくぼみを確認し、さらに堀状のくぼみで行ったボーリング調査により10世紀前葉に降灰したと考えられる灰白色火山灰を確認したことから、これらは城生柵跡を囲む古代に築かれた施設であることが考えられた。今年度は、これらの施設の時期・構造・性格等を把握することを目的として、西辺のD地点で調査を実施した。その結果、土壘状の高まりと堀状のくぼみは、2条の土壘跡、堀跡で構成された区画施設であることが判明し、これらの施設は一度改修されていることも確認した。これらは城生柵跡を囲む区画施設と考えられ、大崎平野北縁に立地する城柵の実態解明に向けて大きな成果をあげることができた。

瑞巌寺境内遺跡は、臨済宗瑞巌寺を中心とした範囲に広がる遺跡で、瑞巌寺の前身である円福寺跡が推定されている。国宝瑞巌寺本堂改修計画に伴って地下の遺構の様相を把握することを目的とし、平成19年度は本堂の周囲で確認調査を行ったが、今年度は本堂下で確認調査を実施した。その結果、中世の遺構が2ないし3時期確認され、遺構としては切石列や溝跡などが検出された。また、近世の瑞巌寺建設に伴うと考えられる柱穴も確認された。

母子沢遺跡は、古代陸奥国府多賀城跡の東門から東に500mの低丘陵上に位置する古代の遺跡で、古代の国府津「塩竈の津」へ至る道路の存在が推定されている。共同住宅建築工事に伴い確認調査を実施した。調査の結果、時期不明の溝跡、近世以降の井戸跡などが検出されたが、古代の遺構は確認できなかった。

浦宿尾田峯貝塚・浦宿C遺跡は、万石浦湾の北岸に位置し、丘陵斜面から低地に立地する縄文時代の遺跡である。女川町営住宅建替事業に伴い確認調査を実施した。調査の結果、浦宿尾田峯貝塚では縄文時代晚期の遺物包含層、ピット群、浦宿C遺跡では縄文時代後期の遺物包含層が検出された。事業者の協力を得て、建築予定地に盛土し、遺構を保存した。



は 羽 場 遺 跡

調 査 要 項

遺 跡 名：羽場遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：28015 遺跡記号：R T）

所 在 地：宮城県加美郡加美町米泉、菜切谷、羽場地内

調査原因：重要遺跡範囲確認

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤貴志 小野寺淳一 村上裕次 初鹿野博之 古田和誠 鈴木啓司

調査期間：確認調査 平成22年10月4日～10月28日

分布調査 平成23年1月12日

調査面積：53m²

調査協力：加美町教育委員会 斎藤 篤

地権者 行政区長

第Ⅰ章 はじめに

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

羽場遺跡は、宮城県北西部の加美郡加美町米泉・菜切谷・羽場に所在する。県北部に広がる大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から分岐して南東に延びる標高50m前後の丘陵先端の台地と、その南側を東流する鳴瀬川・田川左岸の標高30~40mの河岸段丘上に立地する。古代の城柵・官衙遺跡である「国史跡 城生柵跡」に隣接し、その北~西側区域に広がっている（第1図）。

羽場遺跡（第1図1）・城生柵跡（2）の周辺には、多くの古代に属する遺跡がある。菜切谷廃寺跡（3）は、昭和30年に調査が行われ、多賀城創建期を主体とした瓦とともに寺院の金堂と考えられる基壇が検出された（宮城県教育委員会1955）。その時期や位置関係から城生柵跡の付属寺院であると考えられた。昭和54年には、この基壇から南東15mの地点で調査が行われたが、多量の瓦が出土したのみで遺構は検出されていない（中新田町教育委員会1980）。熊野堂遺跡（5）は、昭和59~61年に調査が行われ、多賀城創建期の多量の瓦とともに桁行き5間、梁行き3間の掘立柱建物跡やそれと同じ方向の最大幅6.0m、深さ1.5mの大溝跡等が検出された（菅原編1987、渡邊1988）。調査面積が限られているため遺跡の全体像や性格については不明であるが、瓦や遺構からは城生柵跡との密接な関係が想定される。この他に、調査は実施されていないが、出羽通り遺跡（4）、三吉平遺跡（12）、古屋敷遺跡（14）でも古代の瓦が採集されたとのことである（板垣1973）。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	羽場遺跡	丘陵	官衙・集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	15	米泉城本丸遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古代
2	国史跡 城生柵跡	丘陵	官衙・集落・城館	縄文・奈良・平安・中世	16	要害火葬墓	丘陵	墓	平安
3	県史跡 菜切谷廃寺跡	丘陵	寺院	奈良	17	地蔵館遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・弥生・古代
4	出羽通り遺跡	段丘	散布地	古代	18	泥坂屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
5	熊野堂遺跡	丘陵	官衙・集落?	縄文早前・弥生後・古墳・奈良	19	孫沢B遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
6	大柳遺跡	丘陵	散布地	古代	20	大露路・小露路遺跡	丘陵	散布地	縄文中・古墳後・平安
7	原遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	21	孫沢上の原遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古墳・古代
8	南北原遺跡	丘陵	散布地	古代	22	上の原下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
9	西岡遺跡	丘陵	散布地	古代	23	壇だれ山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
10	大屋敷遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	24	毘沙門道遺跡	段丘	散布地	縄文・古代
11	町史跡 へっぴり塚古墳群	丘陵	円墳・散布地	古墳後・奈良	25	国史跡 東山官衙遺跡	丘陵麓	官衙・城館	旧石器・古墳後・奈良・平安・中世
12	三吉平遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古墳?・古代	26	早風遺跡	段丘	官衙・集落	縄文・古墳・奈良・平安
13	東野火葬墓	丘陵	墓	平安	27	壇の越遺跡	丘陵	官衙・集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世
14	古屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古代	28	古館遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳・奈良・平安

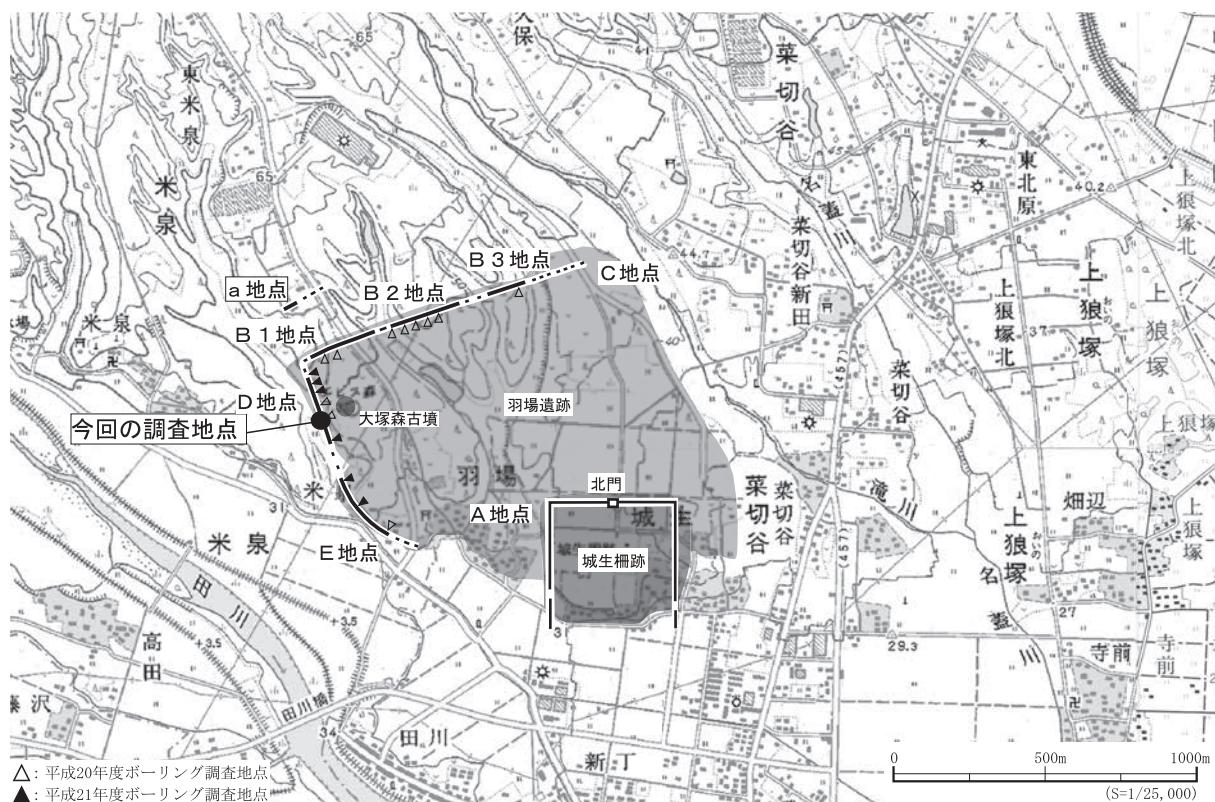
第1図 羽場遺跡・城生柵跡と周辺の遺跡

2. これまでの調査成果について

(1) 羽場遺跡

本遺跡とその周辺では、地元の研究者である板垣剛夫氏によって、通称「女貝堀」といわれる土壘状の高まりと堀状のくぼみの存在が指摘されていた（板垣1973）。平成17年度に宮城県教育委員会は、主に遺跡南西隅（第2図：A地点）と北辺（B1～C地点）の台地を中心とした分布調査を行い、それそれで土壘状の高まりと堀状のくぼみを確認した（宮城県教育委員会2006）。平成19年度には、当教育委員会と多賀城跡調査研究所、加美町教育委員会が遺跡南西隅（A地点）～西辺（D・E地点）・北辺（B1～C地点）を中心とした分布調査を行い、北東隅と東辺については不明であるが、西辺で約550m（B1～E地点）、北辺で約800m（B1～B3地点）の土壘状の高まりと堀状のくぼみを確認した。さらに、B～E地点の堀状のくぼみで補足的に行ったボーリング調査により10世紀前葉に降灰したと考えられる灰白色火山灰が検出された（宮城県教育委員会2009b）。平成21年度には北西隅から南西隅（B1～E地点）にかけて再度ボーリング調査が行われ、複数の地点で灰白色火山灰が検出されている。これらの成果から、確認された土壘状の高まりと堀状のくぼみが城生柵跡の周囲を巡る古代の外郭区画施設跡である可能性が指摘された（宮城県教育委員会2009b）。

以上の調査結果を受けて、周辺の地形を考慮しながら既に周知されていた羽場遺跡の範囲を大きく拡大することとなり、現在、遺跡の範囲は東西約1.1km、南北約1.0kmに及ぶ（第2図）。遺跡の現況は、雑木林、杉林、水田、畠、宅地であり、西辺～北辺にかけては、旧地形は概ね良好に保たれている。



第2図 羽場遺跡の外郭区画施設と調査地点

(2) 城生柵跡

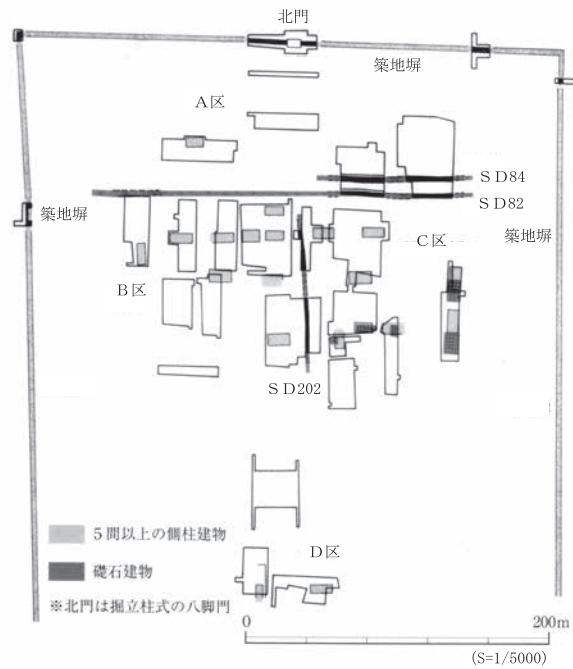
城生柵跡は、昭和52年から平成9年まで旧中新田町教育委員会によって21次にわたる発掘調査が行われた。その結果、①東西355m、南北370m以上の範囲を大溝と築地塀で区画している、②北辺中央には掘立式の八脚門が設けられた、③政庁は未確認である、④内部の北半部は2条の平行する東西溝と南北溝によってA～Cの3区に大別される、⑤B区は掘立柱建物を中心に構成される、⑥C区は倉庫が規則的に並び、火災を受けた礎石建物の周囲からは炭化米が多く出土したことから正倉院と考えられる、⑦B・C区の北端に竪穴住居と工房が集中する、⑧出土した軒瓦の主体は、いわゆる多賀城分類230・231-660のセットである、⑨出土遺物から8世紀中葉に創建され、9世紀初頭まで存続したとみられる、⑩東800mにある菜切谷廃寺跡は付属寺院と考えられる、等の諸点が明らかとなった（第3図、中新田町教育委員会1998、村田・吉田2003）。

遺跡の規模や構造、重要性が明らかとなり、遺跡の保存状態も良好であることから、昭和54年に国史跡に指定されている。

3. 調査に至る経緯と目的

宮城県教育委員会では、平成14～21年度に国庫補助事業の重要遺跡確認調査事業で、加美郡加美町に所在する壇の越遺跡と早風遺跡の調査を実施してきた（第1表）。壇の越遺跡については、宮崎北部地区ほ場整備事業により、平成8年度に確認調査、平成9～20年度に事前調査が行われ、全国的にみて国府より下位の官衙では類例のない方格地割が確認されるなど大きな発見が相次いだ。その重要性を鑑み、当教育委員会では、平成14～16・19～21年度に調査を行い、築地塀や門、櫓で構成する区画施設等を発見する成果をあげた。早風遺跡では、平成15・17年度の分布調査により14地点で土壘状の高まりと堀状のくぼみを確認し、平成17・18・20年度にこの内の6地点で調査を行った。その結果、これらが土壘と堀で構成される大規模な区画施設跡であることが判明した。この区画施設跡は、壇の越遺跡南西部の築地塀や材木塀と一体となって、8世紀後半から東山官衙遺跡や壇の越遺跡を大きく取り囲むことが考えられるようになった。

これらの調査や、栗原市伊治城跡、石巻市桃生城跡、大崎市宮沢遺跡、同新田柵跡等の調査成果から、大崎平野の丘陵縁辺部に分布する城柵・官衙遺跡では、いずれも共通して土壘あるいは築地塀、堀（大溝）などを不整形に巡らす外郭施設を備えていた可能性が出てきた。そのため、壇の越・早風遺跡の調査と併行して、周辺の遺跡や城柵跡についても分布調査を実施し、土壘状の高まりや堀状のくぼみ



第3図 城生柵主要遺構配置図
(村田・吉田2003に一部加筆)

第1表 重要遺跡確認事業に伴う発掘調査

調査年度	遺跡名	所在地	調査地点	調査面積 (m ²)	調査期間	報告書
2002（平成14）	壇の越遺跡	加美町	24E・34E区	24E区：1,150、34E区：7,470	5.07～7.01	宮城県教育委員会2003
2003（平成15）	壇の越遺跡	加美町	39区	2,000	4.07～5.28、11.14～12.05	宮城県教育委員会2004
	早風遺跡ほか	加美町	分布調査	a～g地点	2004.3.24	
2004（平成16）	壇の越遺跡	加美町	43A～43G区	43A区：250、43B区：660、43C区：210、43D区：300、43E区：400、43F区：600、43G区：100	0412～0526	宮城県教育委員会2005
2005（平成17）	早風遺跡	加美町	b・g・h地点	b地点：31、g地点：30、h地点：86	g・h地点：6.06～7.15、 b地点：11.21～11.30	宮城県教育委員会2006
	早風遺跡・羽場遺跡	加美町	分布調査	早風：I～n地点、羽場：A～C地点	12.06～12.08	
2006（平成18）	早風遺跡	加美町	d・n地点	d地点：44、n地点：20	5.15～6.13	宮城県教育委員会2007
	田川八幡館跡	加美町	北側	30	11.27～12.07	
2007（平成19）	壇の越遺跡	加美町	95～100区	95区：99、96区：25、97区：62、98区：9、 99区：114、100区：25	10.29～12.07	宮城県教育委員会2008
	壇の越遺跡	加美町	114～116区	114：48、115：135、116：31		
2008（平成20）	早風遺跡	加美町	o地点	14	5.12～6.19	宮城県教育委員会2009
	羽場遺跡	加美町	分布調査	A～E地点	12.10、2009.3.25～3.26	
	壇の越遺跡	加美町	133～135区	133区：63、134区：19、135区：88		
2009（平成21）	早風遺跡	加美町	p1～p2区	p1区：52、p2区：23	11.02～11.19	宮城県教育委員会2010
	羽場遺跡	加美町	分布調査	B1～E地点	2010.3.16	
2010（平成22）	羽場遺跡	加美町	D地点	53	10.04～10.28	
	羽場遺跡	加美町	分布調査	B1地点の北側	2011.1.12	（本報告書）

の分布の把握に努めてきた。その結果、城生柵跡の北側に広がる羽場遺跡において、遺跡の北辺から西辺にかけて土壘状の高まりと堀状のくぼみが存在することが明らかとなり、かつボーリング調査の成果からそれらが城生柵跡に伴う施設の可能性が考えられた。

このような状況から、羽場遺跡で確認された土壘状の高まりと堀状のくぼみについて、その所属時期、構造・性格などの詳細を明らかにするため、発掘調査を実施することとした。また、現在羽場遺跡で確認されている北辺のさらに北側にも、北辺と方向を同じくした高まりとくぼみが存在することが指摘されている（板垣1973）。これについては、戦後に撮影された航空写真においても見ることができ^{註1)}、この写真では羽場遺跡北辺の北に2列の高まりとくぼみが認められる（図版1-1）。そこで、これらの位置と規模の確認を目的として、周辺地区の分布調査を行った。

4. 調査区と調査方法

（1）発掘調査

D地点は、城生柵跡の北西隅から830mほど離れた台地縁辺部に位置し、台地から谷底平野に至る斜面上に立地する（第2図）。今回調査を行ったのは、大塚森古墳から約75m南西で、推定される北西隅から約250m南に位置し、平成20年度のボーリング調査において灰白色火山灰が確認された地点である。現況は雑木林・杉林であるが、現在の地表面でも斜面を南北方向に延びる土壘状の高まりと堀状のくぼみを長さ200mにわたって明瞭に確認できる。これらの比高は約3.2～4.0mである。

調査地点は雑木林で、約700m²について伐採を行った。そして、土壘状の高まりと堀状のくぼみを横断する位置に幅2m（部分的に1.3～1.5m）、長さ28mの調査区を東西方向に設定した。調査面積は約53m²である。人手による表土除去後、遺構確認を行い、土壘跡については一部で断ち割りを行った。調査区や遺構、周辺地形の測量には電子平板を使用し、断面図については縮尺1/20で実測した。平面図作成にあたっての基準点の座標値（世界測地系第X系）は以下の通りである。

K A : X=-156865.620 Y=681.650 Z=47.383 K B : X=-156876.300 Y=654.200 Z=40.532

写真撮影による記録は、デジタルカメラ（1,000万画素）を用いた。

また、調査区の東と北東側に2箇所のくぼみが認められたことから、平面記録のほかに深さや堆積土の特徴を把握するためハンドオーガーを用いたボーリング調査を行った。

発掘調査については、平成22年10月4日から開始した。遺構の精査・記録は10月20日には終了し、その後埋め戻しを行い、10月28日には調査を終了した。10月23日には地域住民を対象に現地説明会を実施し、9名の参加があった。

(2) 分布調査

調査については、北西隅のB1地点の北側を対象に行った。調査で確認した遺構については、縮尺=1/12,500地形図へ記入し、遺構の状況をデジタルカメラ（1000万画素）で記録した。確認した遺構についてはハンドオーガーを用いたボーリング調査を行い、灰白色火山灰の有無を検討した。

第Ⅱ章 調査成果

1. 発掘調査

南北方向に延びる土壙跡2条、堀跡1条、土取り穴1箇所を確認した（第4・6図）。また、調査区の東と北東側に遺構と推定されるくぼみが2箇所認められた。遺物は、土壙積土から縄文土器、西側斜面堆積土から須恵器壺の肩部破片と石器が1点ずつ出土した。

【SF1A・B土壙跡】東側の土壙跡である。積土には不整合が認められることから、造り直しが1度あったと考えられる（A→B）。B土壙跡はA土壙跡よりも西面側に拡幅して造られている。

A土壙跡は、崩壊やB土壙造成により本来の形状を失っており、現状で判断できる規模は、基底幅3.5m、頂部からの残存高2.0mである。築造方法としては、土壙基底部の東側斜面の旧表土・地山を削りだし、基底部西側にSD3A堀を掘削する。この際、西側斜面中位に幅0.8mの平坦な段が造られ、これにより基底部は断面形が凸状となる。この基底部の旧表土上に積土がなされ土壙が成形される。積土（a～h層）については、地山小ブロックを含む明黄褐色・黄橙色・褐色土が主体となる。①'～⑥'・⑯層は崩壊土である。

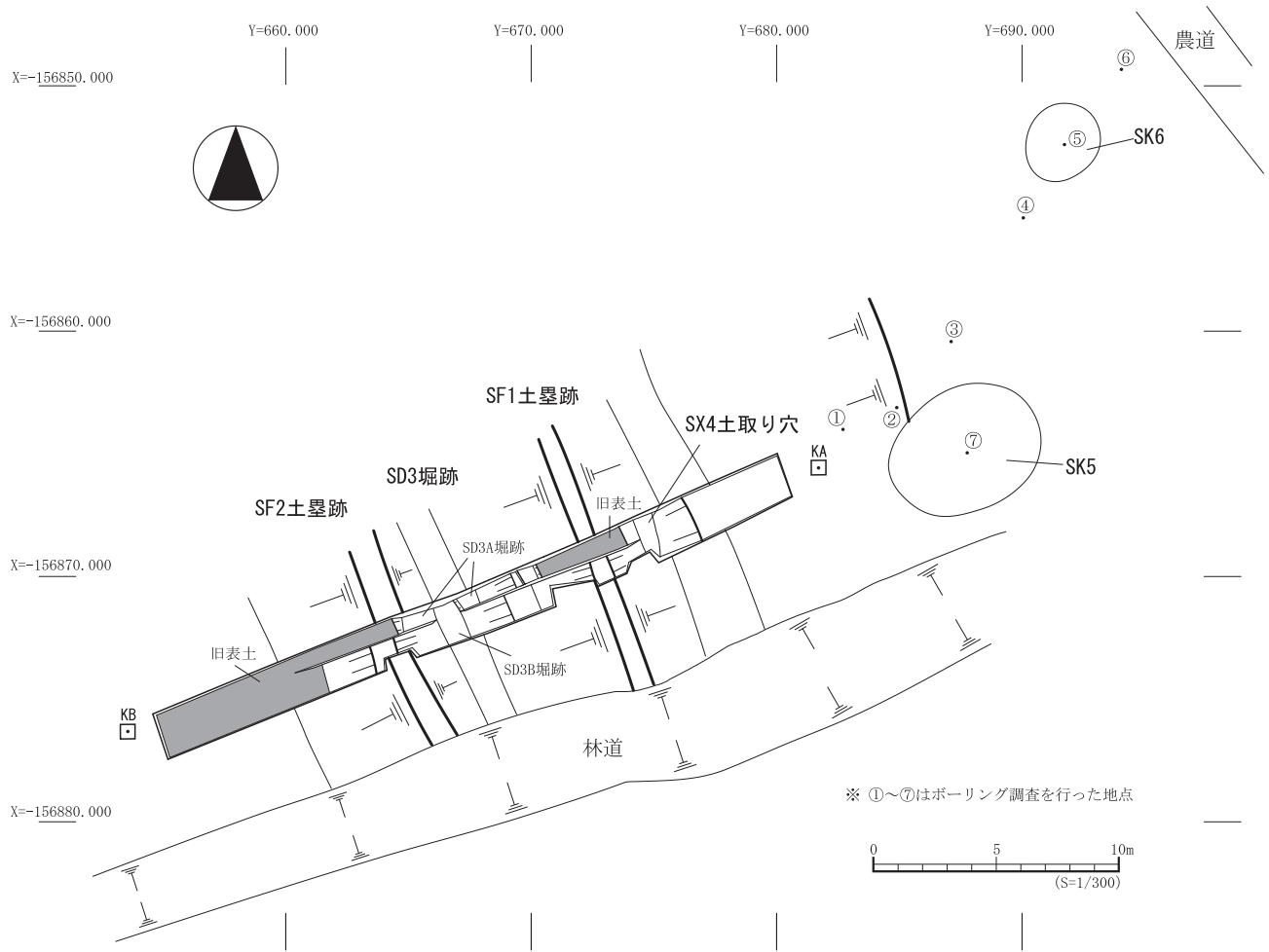
B土壙跡は、一部で崩壊が認められるが、残存状態は概ね良好である。規模は、基底幅4.5m、頂部からの残存高2.2mである。A土壙跡西面の積土と崩壊土の一部が階段状に削られ、これにより形成された平坦面や緩斜面に積土がなされ土壙が成形される。積土（(a)～(j)層）については、地山小ブロック、黒・黒褐色土ブロックを含む褐色・暗褐色・黒褐色土が主体である。1'～5'層は崩壊土である。

遺物は、A土壙跡の積土から胎土に纖維を含む縄文土器深鉢の胴部破片が1点出土した。

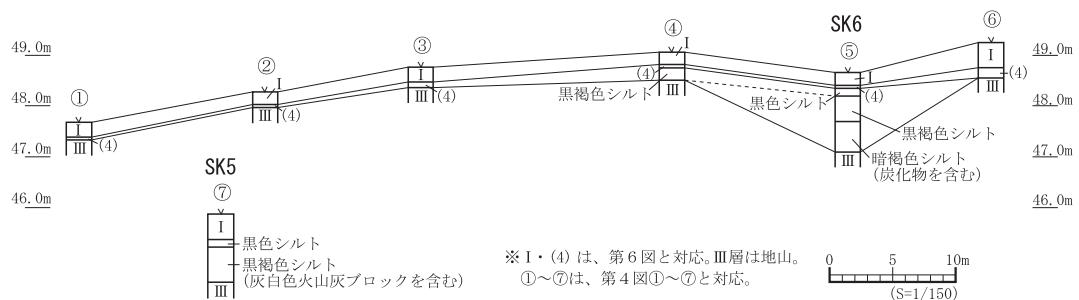
【SF2A・B土壙跡】西側の土壙跡である。積土には不整合が認められることから、造り直しが1度あったと考えられる（A→B）。B土壙跡はA土壙跡よりも東面側に拡幅して造られている。

A土壙跡の規模は、基底幅3.2m、頂部からの残存高0.9mである。旧表土上に積土がなされ土壙が成形される。基底部より西側は旧表土が残存しており、削り出しあは行われていない。積土（a～e層）は、地山・黒色土ブロックを含むにぶい黄橙色・明黄褐色・黄褐色・暗褐色土である。⑦'・⑧'層は崩壊土である。

B土壙跡は、一部で崩壊が認められるが、残存状態は概ね良好である。規模は、基底幅4.0m、頂部からの残存高1.2mである。A土壙跡の東面に積土がなされ土壙が成形される。積土（(a)～(c)層）は、



第4図 D地点調査区と遺構全体図



第5図 トレンチ東側・SK5・SK6の層序

地山・黒色土小ブロックを含む褐色・暗褐色土である。

【SD3A・B堀跡】 SF1・2土壙跡の間に位置する。掘り直しが1度認められ (A→B)、B堀跡はA堀跡と同じ位置でほぼ同じ深さまで掘削されている。

A堀跡は、掘削後の埋土 (17~19層) により底面が嵩上げされた状態となるため、掘削時と機能時で規模が異なる。掘削時の上幅は6.2m、底面幅は3.2m、深さはSF1Aの頂部から4.1~4.5m、SF2Aの頂部から1.0~1.4m、機能時の上幅は6.2m、底面幅は3.5m、深さはSF1Aの頂部から3.6~4.0m、SF2Aの頂部から0.4~0.8mである。断面形はいずれも逆台形を基本とするが、掘削時の東際では、

上幅1.3m、下幅0.9mの範囲で深さ0.4mくぼむ。今回の調査地点では、底面はどちらも北側に向かって緩やかに標高を下げながら傾斜する。堆積土は、最下層がラミナ状の砂層を主体とする水性堆積土(②〇層)、下半部が造成時の埋土(⑯～⑰層)、S F1A崩壊土(⑮・⑯層)、自然堆積層(⑭層)、その上位がS F1A崩壊土あるいはS F1B積土(①～⑬層)である。

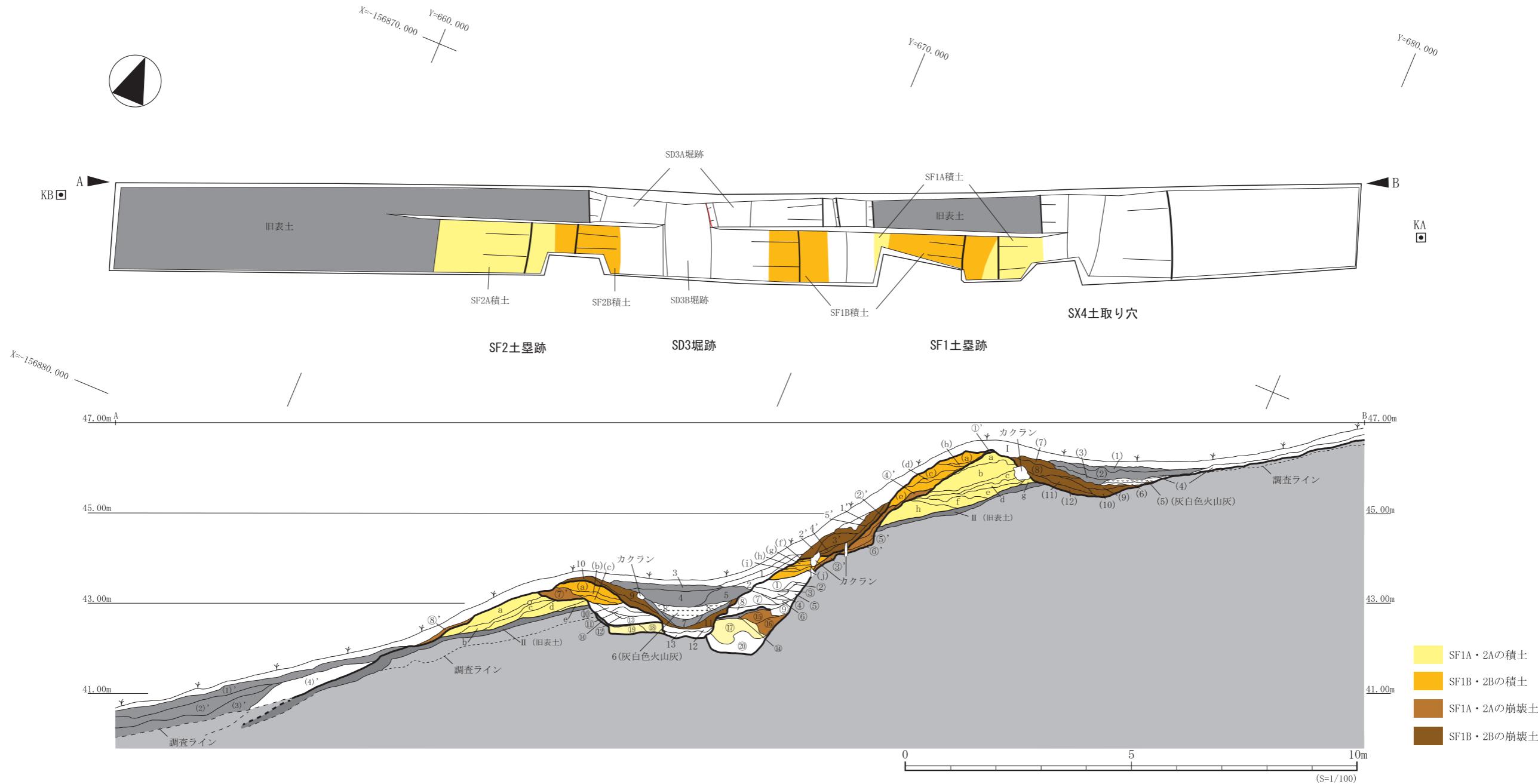
B堀跡は、上幅3.7m、底面幅0.9m、深さがS F1Bの頂部から4.2m、S F02Bの頂部から1.3mである。断面形は逆台形となり、底面から西壁が36cm、東壁が40cmの高さの位置から凹凸しながら緩やかに立ち上がる。今回の調査地点では、底面は北側に向かって緩やかに標高を下げながら傾斜する。堆積土は、最下層が機能時の堆積土(12・13層)、下位がS F1B・S F2B崩壊土(9～11層)、中位から上位が黒・黒褐色・暗褐色土を主体とする堀跡の堆積土(1～8層)である。中位には灰白色火山灰(6層)が最大で厚さ27cm認められた。すべて自然堆積土である。

【S X4土取り穴】 S F1土墨跡の東側に位置する。規模は、上幅3.1m、下幅0.7m、深さは、S F1頂部から1.0mである。断面形はレンズ状である。堆積土は、下位がS F1崩壊土((7)～(12)層)、中位が暗オリーブ褐色土((6)層)と灰白色火山灰((5)層)、上位が黒・黒褐色土((1)～(4)層)である。灰白色火山灰は最大で厚さ10cm認められた。すべて自然堆積土である。

【S K5・6】 調査区の東と北東側に認められた2箇所のくぼみである(第4・5図)。S K5は調査区東端から4.1m東に位置する。長軸6.3m、短軸4.9mの楕円形で、深さは1.35mである。最下層の黒褐色シルト層中位には灰白色火山灰が認められた(図版4-2)。S K6は調査区東端から15.7m北東に位置する。長軸3.3m、短軸2.9mの円形で、深さは1.46mである。最下層の暗褐色シルト層には炭化物片が含まれていた。

2. 分布調査

羽場遺跡の北辺北西隅から約180m北、大塚森古墳から約380m北の台地上で2条の土墨状の高まりとその間に挟まれた1条の堀状のくぼみを確認した(第2図:a地点)。これらは、東西に50m程度認められる(図版4-4～6)。高まりとくぼみの高低差は1.5m程度である。2箇所でボーリング調査を行い、いずれも地表面から1.0m下で灰白色火山灰を確認した(図版4-7・8)。底面は確認していないが、1.5m以上の深さとなる。航空写真で認められたもう1列については、積雪のため地表面の状態が悪く見つけることができなかった。



層	土色	土性	備考
I 表土	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	
SX4 土取り穴 (1) 黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト		
(2) 黒色 (7.5YR2/1)	粘土質シルト		
(3) 黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰粒含む。	
(4) 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒・小礫をわずかに含む。	
(5) 灰白色火山灰			
(6) 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	シルト	小礫を少量含む。	
(7) 褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山粒を含む。	
(8) 暗褐色 (7.5YR3/4)	砂質シルト		
(9) 褐色 (7.5YR4/3)	粘土質シルト		
(10) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	粘土質シルト	地山粒・小礫を少量含む。	
(11) 暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山粒を少量含む。	
(12) 褐色 (7.5YR4/6)	粘土質シルト	地山粒・小礫を少量含む。	
西斜面堆積土 (1') 黒褐色 (10YR2/3)	シルト		
(2') 黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山粒・小礫を含む。	
(3') 黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒を含む。	
(4') にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	灰白色火山灰小ブロックを含む。	
SD3A 堀跡 1 暗褐色 (10YR3/4)	シルト		
2 暗褐色 (10YR3/3)	シルト		
3 黒褐色 (10YR2/3)	シルト		
4 黒色 (10YR2/1)	シルト	砂礫をラミナ状に含む。	
5 黒褐色 (10YR3/1)	シルト	砂礫をラミナ状に含む。	
6 灰白色火山灰			
7 黑褐色 (10YR3/1)	シルト		
8 黑褐色 (10YR3/2)	シルト		
9 暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	地山小ブロックを少量含む。	
10 暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	地山粒をわずかに含む。	
11 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックをわずかに含む。細砂を含む。	機能時の堆積土
12 暗褐色 (7.5YR4/2)	シルト	地山小ブロックをわずかに含む。	
13 褐灰色 (7.5YR4/1)	砂質シルト	地山ブロックを含む。	
SF1A 崩壊土 ① 橙色 (7.5YR6/6)			
② 褐色 (7.5YR4/6)			
③ 黒褐色 (7.5YR4/3)			
④ 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤ 暗褐色 (7.5YR3/4)			
⑥ 褐色 (7.5YR4/4)			
⑦ 暗褐色 (7.5YR3/4)			
⑧ にぶい褐色 (7.5YR7/4)			
⑨ 橙色 (7.5YR6/5)			
⑩ 暗褐色 (7.5YR3/3)			
⑪ 褐色 (7.5YR4/4)			
⑫ 黒褐色 (7.5YR2/2)			
⑬ 暗褐色 (7.5YR3/4)			
⑭ 黑褐色 (7.5YR3/2)			
⑮ 褐色 (7.5YR4/3)			
⑯ にぶい褐色 (7.5YR5/4)			
⑰ にぶい橙色 (7.5YR7/4)			
⑱ 黒褐色 (7.5YR3/2)			
⑲ 戻褐色 (7.5YR4/2)			
⑳ にぶい褐色 (7.5YR6/3)			
SF1B 崩壊土 1' にぶい褐色 (7.5YR5/4)			
2' 黒褐色 (7.5YR3/2)			
3' 暗褐色 (7.5YR3/3)			
4' 黑褐色 (7.5YR3/2)			
5' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR3/2)			
②' にぶい褐色 (7.5YR6/3)			
③' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ① 黒褐色 (7.5YR4/3)			
② 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③ にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑧' 明黄褐色 (10YR7/6)			
SF1A 崩壊土 ①' 黒褐色 (7.5YR4/3)			
②' 黒褐色 (7.5YR3/3)			
③' にぶい褐色 (7.5YR7/3)			
④' 褐色 (7.5YR4/3)			
⑤' にぶい橙色 (7.5YR7/3)			
⑥' 褐色 (7.5YR4/3)			
SF2A 崩壊土 ⑦' 褐色 (7.5YR4/3)			

第Ⅲ章 まとめ

1. 遺構の特徴と年代

(1) 特徴

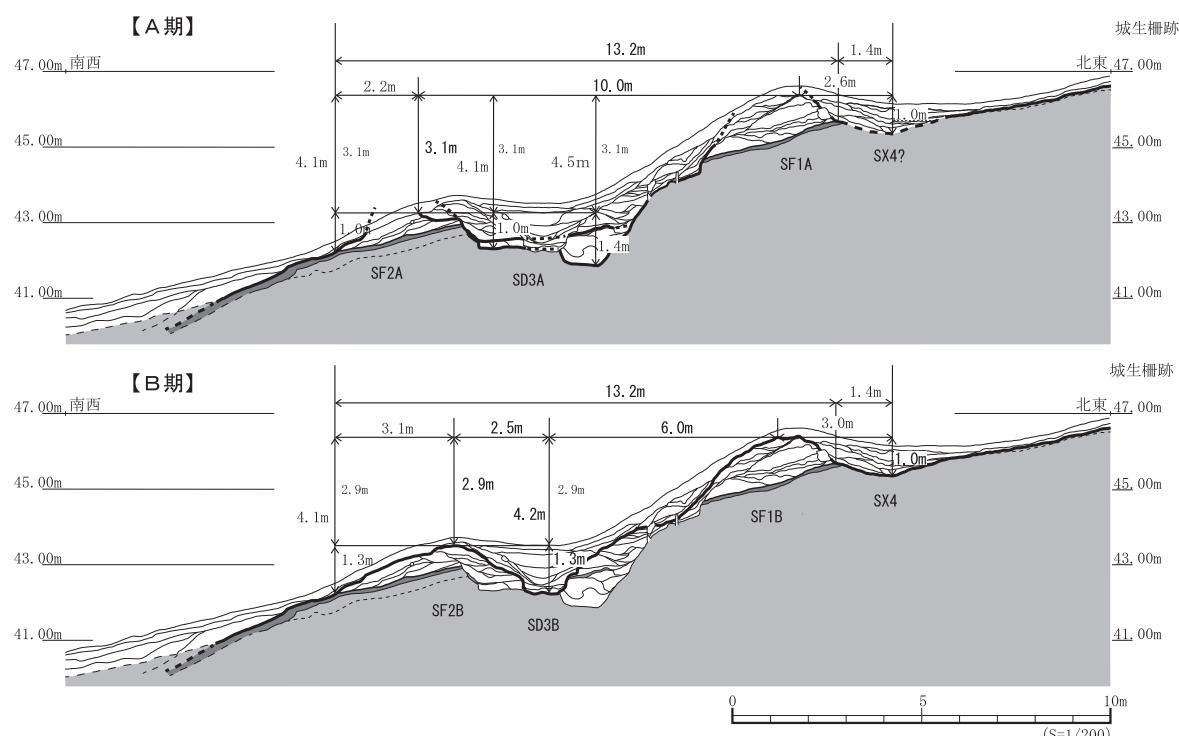
立地：標高42～47mの台地縁辺の西斜面上に立地する。

構成：D地点の土壘状の高まりと堀状のくぼみは、高さの異なる2条の土壘跡（SF1・2）と堀跡（SD3）、土取り穴（SX4）であることが確認された。SF1・2土壘跡は一度改修されており（A→B）、SF1は西面側、SF2は東面側が積み直しされている。これらの土壘跡に挟まれたSD3堀跡にも新旧2時期（A→B）の存在が認められた。すなわち、当地点の土壘と堀は全体が一度改修されており、重複関係や土壘の積土の特徴から、A期がSF1A-SF2A-SD3A、B期がSF1B-SF2B-SD3Bの対応関係になると考えられる（第7図）。

SX4土取り穴は1時期のみ認められた。SD3Bと同様、堆積土に灰白色火山灰が認められたことからB期に伴うものと考えられる。A期の存在については、SF1の東側斜面がA期土壘造成時に削り出されたと考えられることから、その際に一連の作業として掘削された可能性もあるが、今回の調査ではその明瞭な痕跡を確認することはできなかった。

規模：A期段階については、崩壊やB期造成により本来の形状を失っているため、残存している範囲でその規模を計測した。東側のSF1土壘跡裾部と西側のSF2土壘跡裾部までの距離は13.2m、SF1とSF2土壘跡頂部間の距離は10.0m、その高低差は残存高で3.1mである。

B期段階では、東側のSF1裾部と西側のSF2裾部までの距離が13.2m、SF1とSF2頂部間の距離が8.5m、その高低差は残存高で2.9mである。SF1頂部とSD3堀跡底面の高低差は4.2m、SF2との高低差は1.3m、SF1頂部とSX4土取り穴底面との高低差は1.0mである。



第7図 D地点の土壘跡・堀跡の規模

形状：S D3堀跡底面からS F1土壘跡西斜面の中位までの角度がA期段階は約53°、B期段階は約40～58°、S F2土壘跡の東斜面がA期段階は約52°、B期段階は約31°となり、A期よりもB期のほうが土壘跡と堀跡の傾斜は緩やかになる。なお、A期のS D3の東際が一段深くなるが、これについては堆積土の状況やS F1・2との関係から、現時点では掘削時に部分的に深くなっているものと判断した。この部分が、断面形状から古い段階の堀跡になる可能性も考えられたが、今回は1箇所での判断なので、今後、他の地点を調査した際に改めて検討したい。

築造方法：S F1A土壘跡では、土壘基底部の東西側の斜面を掘削して基底部が凸状に造り出され、旧表土上に直接積土が行われる。こうした手法は、涌谷町城山裏土壘跡でも認められる（涌谷町教育委員会2010）。城山裏土壘跡では、長さ110m以上にわたってこのような基底部の造りだしが確認されている。B土壘跡では、A土壘跡の西面の積土と崩壊土を階段状に削り出し、これによって生じた平坦面や緩斜面に積土がなされ土壘が築かれる。これは、現代の土木工事で斜面上での盛土の流出を防ぐために斜面に水平面を設ける「段切り」とよばれる工法（土質工学用語辞典編集委員会編1985）であり、同様の事例は、同じく斜面上に立地する加美町早風遺跡h地点の新期土壘の造成でも確認できる（宮城県教育委員会2006）。

S F2A土壘跡は旧表土上に、B土壘跡はA土壘跡の東面に積土がなされ土壘が築かれる。

S D3A堀跡の埋土について：S D3A堀跡の堆積土は、下から水性堆積土（第6図⑩層）、埋土（⑯～⑰層）、S F1A土壘崩壊土（⑮・⑯層）、旧表土に類する自然堆積土（⑭層）の順となる。これは、S D3Aを掘削し、流水があり、その後埋土が行われ、崩壊土が堆積し、その上面が一時期地表面となつたことを表す。この内埋土については、特徴が崩壊土とは異なり土壘積土と類似すること、数百メートルも続く堀の底面に意図的に埋土を行う事例が認められないことから、現状では造成段階に土壘積土の素材となる土が崩落し堆積したものとして理解している。

S K5・6について：調査区の東と北東側で認められたS K5・6は、地表面からの深さや堆積土の特徴から遺構の可能性がある。S K5については、堆積土に灰白色火山灰が含まれている。

（2）年代

S D3B堀跡とS X4土取り穴、S K5の堆積土中位から、10世紀前葉に降灰したと考えられている灰白色火山灰が検出された。したがって、S F1・2土壘跡やS D3堀跡、S X4土取り穴、S K5は、少なくとも10世紀前葉以前の古代の遺構であると判断できる。

2. 羽場遺跡の区画施設跡について

（1）構成

確認されている区画施設跡の規模は、北西隅と南西隅が不明瞭だが、西辺（B 1～E地点）約550m、北辺（B 1～B 3地点）約800mである（第2図）。今回の調査により、西辺の土壘状の高まりと堀状のくぼみは土壘跡と堀跡であることが判明した。したがって、北辺についても同様の構造と考えられる。構成は、西辺ではD地点で土壘跡2条、堀跡1条、北辺では土壘跡1条、堀跡1条である。北辺東側と東辺については不明である。

地形との関係では、西辺は南東方向に延びる台地縁辺の斜面中位に、北辺はその台地や丘陵尾根を横断して造られている。北辺については、南流する沢により台地や丘陵の面積が小さくなる部分が選定されている。これらは、地形を優先させて築造されたと考えられるため、西辺は北西—南東方向、北辺は北東—南西方向となる。なお、西辺や加美町早風遺跡では斜面地形を利用して土壘と堀が造られ、地形と一体となって防御性を高めているのに対して、北辺は平坦な台地上に築造されており、それらとは異なる立地となる。この点については、分布調査で現在の北辺の北側で新たな土壘状の高まりと堀状のくぼみが認められたことから、平坦な台地が広がる遺跡北側では地形的に防御性が低いために、区画施設を複数列設置することでその不利な点を補おうとした可能性がある^{註2)}。東辺については、C地点の東側に滝川という小河川が南流しており、これに沿って設けられた可能性と、滝川の東には城生柵跡の付属寺院である菜切谷廃寺跡や、多賀城創建期の瓦や大型の掘立柱建物跡が発見された熊野堂遺跡が所在することから、滝川を越えてさらに東に延びる可能性が考えられる。

(2) 城生柵跡との関係

羽場遺跡の土壘跡・堀跡は、城生柵跡の北・西を囲むような位置関係にある。こうした状況は東山官衙遺跡と壇の越遺跡・早風遺跡との関係と類似することから、この土壘跡と堀跡についても城生柵跡の外郭区画施設であると考えられる。その際、近接する大塚森古墳の墳頂部で検出された掘立柱建物跡が、立地、構造や位置関係から「櫓」となる可能性が指摘されており注目される^{註3)}（宮城県教育委員会2009b）。

3. 今後の課題

土壘・築地・堀で構成される外郭区画施設をもつ城柵跡は、栗原市伊治城跡、石巻市桃生城跡、大崎市宮沢遺跡、同新田柵跡、加美町東山官衙遺跡があり、これらは政庁—内郭—外郭という三重構造もしくは複郭的な構成をとるという特徴が指摘されている（熊谷2004、村田2004・2007）。城生柵跡についても、類似した特徴が認められることから三重構造の城柵跡になるものと考えられる。しかし、詳細については不明な点が多い。今後は、外郭区画施設の全体構成や構築年代・変遷を把握すること、そして区画施設内の状況を明らかにして羽場遺跡の実態と性格の解明を行うことが課題と考える。また、周辺の遺跡には、城生柵跡と同時期の瓦が出土している遺跡がある。これらの遺跡との関連を検討し、当地域の城柵・官衙遺跡の構造的特徴、機能、性格を解明していくことも必要となる。その際には、地理的にも近く、内郭の規模、遺構群の構成、造営時期、須恵器・瓦の特徴等多くの共通点があり、天平9年の奥羽連絡路建設事業（今泉2002）での密接な関連が想定される東山官衙遺跡を含めた検討も必要となろう（村田・吉田2003、村田2007）。

註1) 栗原市教育委員会の安達訓仁氏より航空写真の提供と、そこに見られる高まりとくぼみの存在についてご教示をいただいた。

註2) 板垣剛夫氏の「女貝堀」とこれまでの調査成果との対応については、羽場遺跡の北辺で確認された土壘状の高まりと堀状のくぼみが「第二線」（宮城県教育委員会2006）、今回北辺の北側で確認されたものが「第三線」に相当するとみられる。

註3) この建物については、出土遺物はないが、遺構の重複関係や柱穴掘方の特徴、建物の方向が城生柵跡の建物群と類似することから古代のもので、さらに、墳頂及び墳丘堆積土の出土遺物から8世紀代になる可能性も指摘されている（安達2008）。

引用文献

- 安達訓仁 2008 「第5節 古墳築造以後の遺構・遺物」『東北学院大学論集 歴史と文化』43 pp.168-184
- 板垣剛夫 1973 「郷土の律令支配とその文化 第二章 奈良時代 第三篇 古代」『宮崎町史』pp.140-160
- 今泉隆雄 2002 「天平9年の奥羽連絡路開通計画について」『国史談話会雑誌』43 pp.17-38
- 熊谷公男 2004 『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット 山川出版社
- 菅原祥夫編 1987 『温故第14号 熊野堂遺跡』
- 辻 秀人編 2008 「大塚森古墳の研究」『東北学院大学論集 歴史と文化』43 pp.1-208
- 土質工学用語辞典編集委員会編 1985 『土質工学用語辞典』
- 中新田町教育委員会 1980 『城生柵跡』 中新田町文化財調査報告書第4集
- 中新田町教育委員会 1998 『城生柵跡』 中新田町文化財調査報告書第25集
- 宮城県教育委員会 1955 『菜切谷廃寺跡』 宮城県文化財調査報告書第2集
- 宮城県教育委員会 2003 『壇の越遺跡ほか』 pp.1-46 宮城県文化財調査報告書第195集
- 宮城県教育委員会 2004 『壇の越遺跡ほか』 pp.1-46 宮城県文化財調査報告書第199集
- 宮城県教育委員会 2005 『壇の越遺跡ほか』 pp.1-46 宮城県文化財調査報告書第202集
- 宮城県教育委員会 2006 「東山官衙遺跡周辺地区」『東山官衙遺跡周辺地区ほか』 pp.1-46 宮城県文化財調査報告書第208集
- 宮城県教育委員会 2007a 『早風遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第213集
- 宮城県教育委員会 2007b 「早風遺跡」「早風遺跡ほか」 pp.1-38 宮城県文化財調査報告書第213集
- 宮城県教育委員会 2008 『壇の越遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第217集
- 宮城県教育委員会 2009a 『壇の越遺跡・早風遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第221集
- 宮城県教育委員会 2009b 「羽場遺跡」「壇の越遺跡・早風遺跡ほか」 pp.27-36 宮城県文化財調査報告書第221集
- 宮城県教育委員会 2010 『壇の越遺跡・早風遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第225集
- 村田晃一 2004 「三重構造城柵論－伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2」『宮城考古学』6 pp.159-186
- 村田晃一 2007 「陸奥北辺の城柵と郡家－黒川以北十郡の城柵からみえてきたもの－」『宮城考古学』9 pp.85-110
- 村田晃一・吉田 桂 2003 「城生柵跡の概要」『第29回 古代城柵官衙遺跡検討会』 pp.171-180
- 涌谷町教育委員会 2010 「城山裏土塁跡」『第36回 古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』 pp.193-201
- 渡邊泰伸 1988 「宮城県加美郡中新田町熊野堂遺跡調査略報 官衙・前方後方墳形方形周溝墓の調査」『仙台育英学園高等学校研究紀要』2 pp.1-26



1. 羽場遺跡・城生柵跡周辺の空中写真（上が北） 国土交通省：国土地理情報
(1947年米軍撮影空中写真、整理番号：M321 314CW)



2. 羽場遺跡B1・B2・D地点遠景（南東から）



1. SF1・2 土塁跡調査前の状況（南西から）



2. SF1 土塁跡・SX4 土取り穴調査前の状況（南東から）



3. SX4 土取り穴と東斜面の調査前の状況（南から）



4. 調査区東端の状況（東から）



5. SF1B 土塁跡・SD3B 堀跡（南から）



6. SF1・2 土塁跡（南西から）

図版2



1. SF1 土壘跡・SD3 堀跡の断面（南西から）



2. SF1 土壘跡・SX4 土取り穴の断面（東から）



3. SF1 土壘跡の積土の状況（南東から）



4. SF1B 土壘跡の積土の状況（南東から）



5. SD3 堀跡の断面（南東から）



6. SD3 堀跡・SF2 土壘跡の断面（東から）



7. SF2 土壘跡の積土の状況（南西から）

図版3



1. SK5 全景 (西から)



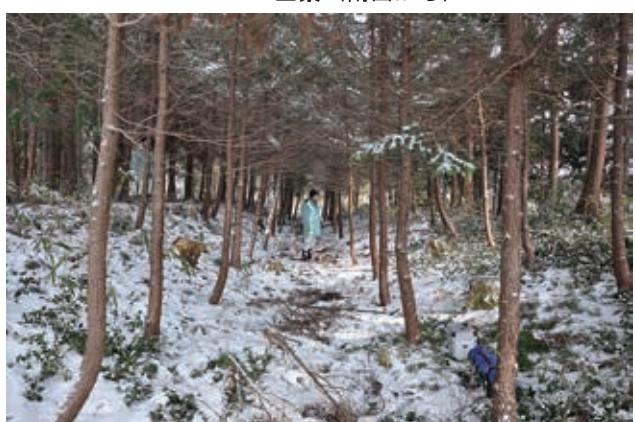
2. SK5 で確認した灰白色火山灰



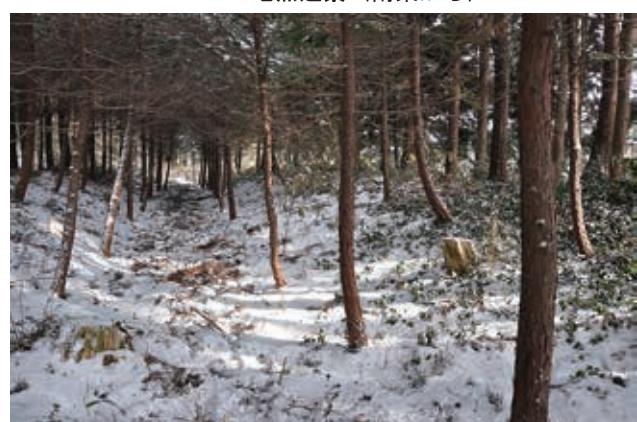
3. SK6 全景 (南西から)



4. a 地点近景 (南東から)



5. a 地点の土壘状の高まりと堀状のくぼみ (西から)



6. a 地点の土壘状の高まりと堀状のくぼみ (西から)



7. ボーリング調査風景



8. a 地点で確認した灰白色火山灰

図版 4

ずいがんじけいだい
瑞巖寺境内遺跡

調査要項

遺跡名：瑞巖寺境内遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：17099 遺跡記号：Z K）

所在地：宮城県宮城郡松島町松島字町内

調査原因：国宝 瑞巖寺本堂改修工事に伴う確認調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

菊地逸夫 佐藤貴志 小野寺淳一 村上裕次 鈴木啓司

松島町教育委員会 森田義史

調査期間：平成22年5月31日～7月7日

調査対象面積：61.5m²

調査面積： 34.1m²

調査協力：松島町教育委員会 宗教法人 瑞巖寺 公益財団法人 文化財建造物保存技術協会

国宝瑞巖寺建造物保存修理工事事務所

1. 遺跡の概要

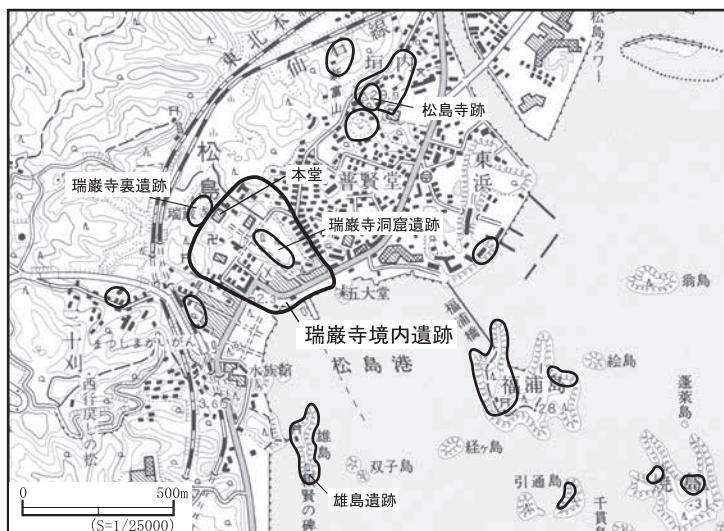
瑞巌寺境内遺跡は、宮城郡松島町松島字町内に所在する、臨済宗瑞巌寺を中心とした範囲に広がる古代から近世の遺跡である（第1図）。遺跡は松島湾の北西部に位置し、海に向かって北西から南東に延びる丘陵の端部、海拔2～20mの地点に立地する。遺跡内には、近世の瑞巌寺洞窟遺跡を含み、北側には瑞巌寺裏遺跡が隣接する。遺跡の南約700mには中世の板碑が多数所在する雄島遺跡があり、平成17年度の調査によって12世紀後半から14世紀後半の納骨跡を検出し、中世における霊場としての松島の一端が明らかとなった（宮城県教育委員会2007）。

瑞巌寺は、伊達家の菩提寺として慶長14年（1609）に建立されたが、その前身として天長5年（828）に滋覚大師円仁が開山した天台宗延福寺が、正元元年（1259）に現在の境内に建立された鎌倉幕府直轄の臨済宗円福寺があったと伝えられている。

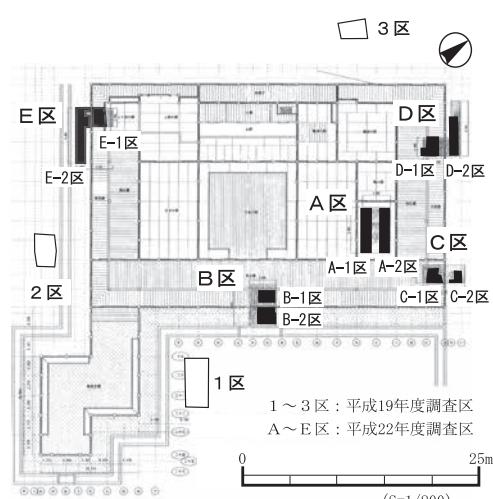
円福寺は弘安8年（1285）頃に空巖により全体が整備されたと伝えられ、禪寺様式の伽藍が成立したと推定される。当時の様子は元亨6年（1323）写本の遊行上人縁起絵（真光寺）や藤原隆章によって書かれた暮帰絵（正平6年 1351）などに見ることができるが、実際の詳細な位置や配置、規模などについては不明である。

瑞巌寺境内遺跡では、平成3・4年度に新宝物館などの建設に伴い調査が行われ、13世紀末～17世紀初頭まで5時期13面の遺構面と共に、建物跡・池跡・井戸跡などの遺構や国産陶器・中国産陶磁器・漆器・瓦などが出土し中世円福寺期の境内の様相が明らかとなった（瑞巌寺2009）。さらに、平成4年度と同14年度には周辺地区の調査が行われ石窟群の一部は13～14世紀まで遡る可能性が考えられた（宮城県教育委員会2003）。平成19年度には本堂改修工事に伴う本堂隣接地の確認調査が行われ、2時期ないし3時期の中世の遺構期が明らかとなり、複数の火災の痕跡や切石列・石積遺構が確認され、本堂付近に中世の円福寺に関わる遺構が存在する可能性が高まった（宮城県教育委員会2008）。

今回の調査は平成19年と同様に本堂改修工事に伴う確認調査で、本堂床下での遺構の有無、遺構面の深さを把握する目的で行った。調査区は掘削可能な場所で全域の旧地形や遺構の全体像が推定できるように5ヶ所（A～E区）設定した（第2図）。調査対象面積は61.5m²、調査面積は34.1m²である。



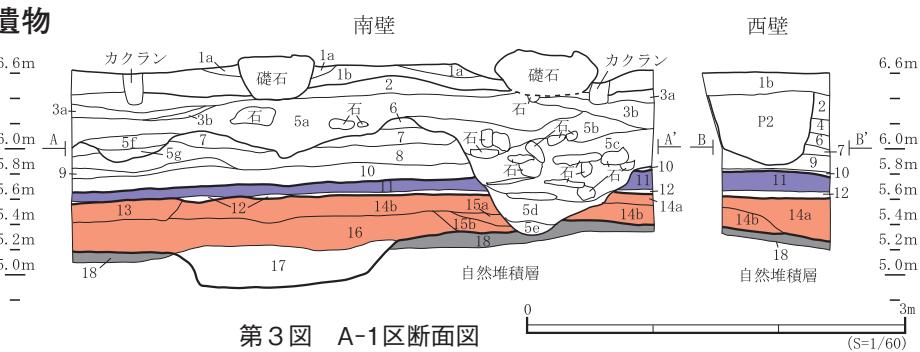
第1図 遺跡の位置



第2図 調査区の位置

2. 検出された遺構と遺物

[A区] 本堂「松の間」の床下部に位置する。現存する東柱を避けて調査したため、平行する南側（A-1区）と北側（A-2区）の2本のトレーニチを設定した。



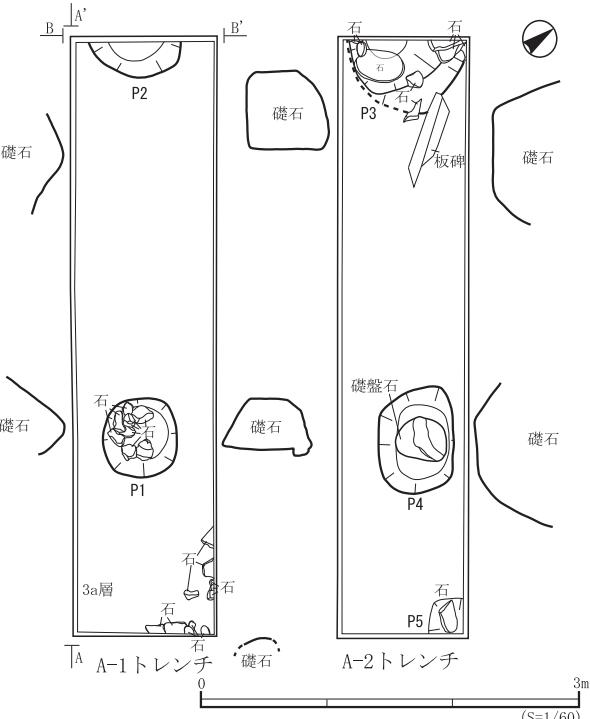
現表土は本堂下に築かれた基壇上面で、ここから約140cmで地山面に達し、その間17枚の層に大別された（第3図）。この中で11層（標高5.7m～5.8m）、13・14a層（標高5.5m～5.6m）、18層（標高5.2m～5.4m）は上面が硬くしまり、遺構も存在することからそれぞれ機能面（遺構面）と考えられる。13・14a層と18層からはそれぞれの上面を掘り込み面とする土壌と小ピットが検出された（図版1-①）。1～10層は瑞巌寺の造営に伴う整地層、11層以下がそれ以前（中世以前）の層と考えられる。

瑞巌寺に伴う整地層の中で、礎石を据えて平坦面を作り出した段階（2・3層上面）で柱穴が検出されている（第4図）。柱穴は礎石と礎石の間に掘られ、柱筋もこれらと一致する。形状は円形を基調とし、大きさは径70～80cm、深さ約60cmあり、P1、

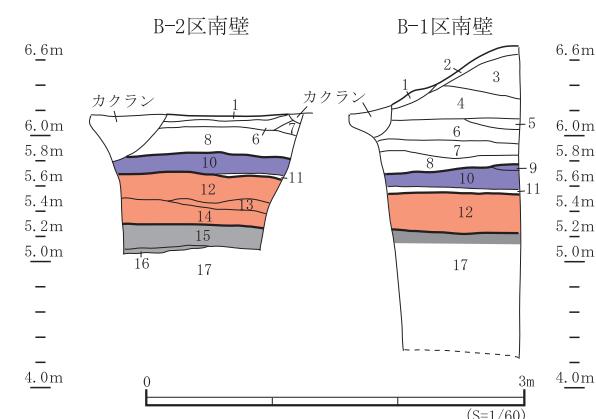
P4からは底面に据えた石が見つかっている。すべての柱から抜き取り痕が検出されている。抜き取り後は本堂下の基壇上面の仕上げとして盛土された1ab層（非常に硬くしまった貝灰を含む黒褐色土）に覆われており、柱が存在したのは礎石を据えてから基壇を完成させるまでの短い期間と考えられる。瑞巌寺の柱を組み立てる際の仮柱（足場）の柱穴と考えられる。

[B区] 本堂正面の入り口部分に位置する。側柱列の縁石を挟んで内側（B-1区）と外側（B-2区）の2本のトレーニチを設定した。B-1区は本堂下基壇の南側縁辺部、B-2区は建物の外側にあたる。

B-1区では本堂下基壇の上面から約150cmで、B-2区では現表土から85cmで地山面に達し、その間16枚の層に大別された（第5図）。両調査区の層序は基本的に同じだが、B-1区には基壇に伴う盛土（3・4層）がみられる。この中で9・10層（標高5.7m



第4図 A区2・3層検出遺構



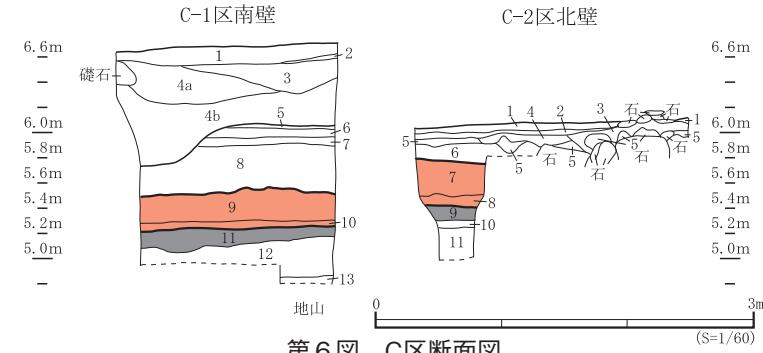
第5図 B区断面図

～5.8m)、12層(標高5.5m～5.6m)、17層(標高約5.2m)は中世以前の遺構面(機能面)と考えられる。B-1区は17層が地山面であることを確認した後、標高約4.3mまで掘り下げを行い、標高5.1m付近で10世紀初頭に降下したとされる「灰白色火山灰」のブロックを確認した。

検出された遺構にはB-2区の17層上面から掘り込まれた土壌(図版1-⑤)がある。土壌は、南西側の部分が検出され、全体はさらに北東側に延びる。検出された部分の長さは1.8m、幅は60cmある。深さは最も深い部分で約25cmあり、断面形は浅い皿状を呈している。堆積土中から軒丸瓦が出土した。

[C区] 本堂北東隅に位置する。側柱列の縁石を挟んで本堂内側(C-1区)と外側(C-2区)の2本のトレンチを設定した。

C-1区は本堂の北東隅に設定した調査区で、現地表は基壇上面となる。約145cmで地山に達し、その間11枚の



第6図 C区断面図

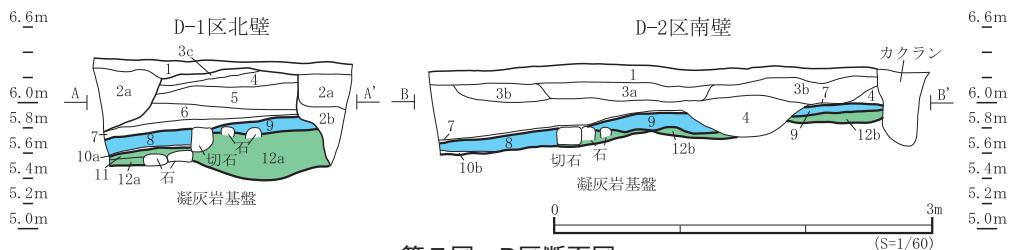
層に大別された(第6図)。遺構は検出されなかったが、9・11層上面が硬くしまり安定した硬化面となっていることから遺構面と考えられる。遺構面の高さは、9層が約5.5m、11層が約5.3mである。本堂の基壇に伴う盛土は1～8層で、5層の上面から礎石の基礎地業となる掘り込みが行われている。

C-2区は本堂から書院へ続く廊下の床下に設定した調査区である。地表面(1層上面)の高さはC-1区の4層の上面とほぼ同じであり、土の特徴もよく似ていることからこれらの層は対応するものと考えられる。南東部で不整の落ち込みとその中から凝灰岩の切石が確認されたため、この部分をそのまま残し、北西部のみ掘り下げを行った。深掘りを行った部分では湧水が激しく地山まで掘り下げる事はできなかったが約5.0mまで掘り下げ、11枚の層を確認した(第6図)。この中で7・9層上面が硬くしまることから遺構面と考えられ、C-1区の9・11層にそれぞれ対応すると考えられる。遺構面の高さは、7層が約5.7m、9層が約5.4mである。落ち込みと切石は2層を掘り下げた段階で確認され、3層(C-1区の5層に対応)を掘り込んでいることから、近世の遺構と考えられる。

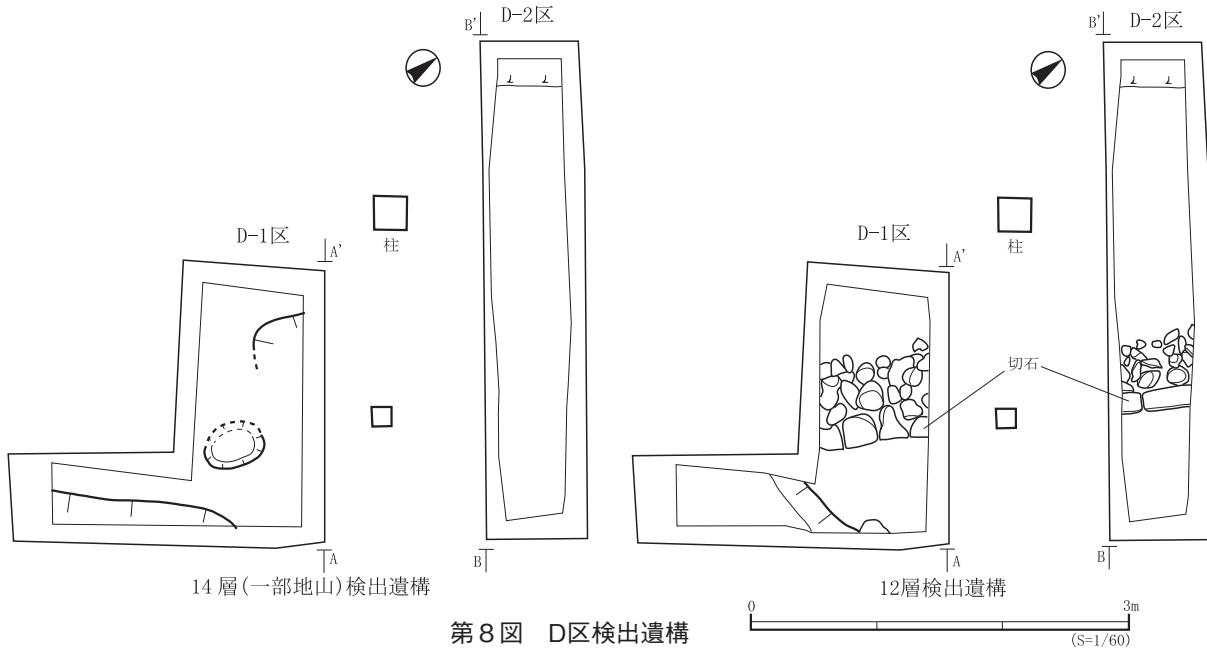
[D区] 本堂北西部に位置する。側柱列の縁石を挟んで本堂内側(D-1区)と外側(D-2区)の2本のトレンチを設定した。

D-1区は本堂の北西部に設定した調査区で、現地表は基壇上面となる。約95cmで基盤となる凝灰岩層に達し、その間14枚の層に大別された(第7図)。この中で14層は基盤となる凝灰岩層を直接覆う整地層で部分的にみられる。14層上面から溝状の落ち込みとピットが、12a層から凝灰岩の切石列が、8・9層の上面から硬くしまった硬化面が検出されており、それぞれ遺構面と考えられる(第8図)。遺構面の高さは、14層が5.4～5.5m、12a層が5.6～5.8m、8・9層が約6.0mである。本堂の基壇に伴う盛土は1～7層で、3層の上面から礎石の基礎地業となる掘り込みが行われている。

14層上面の遺構は溝状の落ち込みとピットである。溝状の落ち込みは南西から北東に延びるが北側の上端の一部が検出されたのみで詳細は不明である。ピットは30×40cmの楕円形を呈し、深さは約10cmである。12a層から検出された遺構は切石列で東側の部分で小口面を揃えている。一段積みで、



第7図 D区断面図



第8図 D区検出遺構

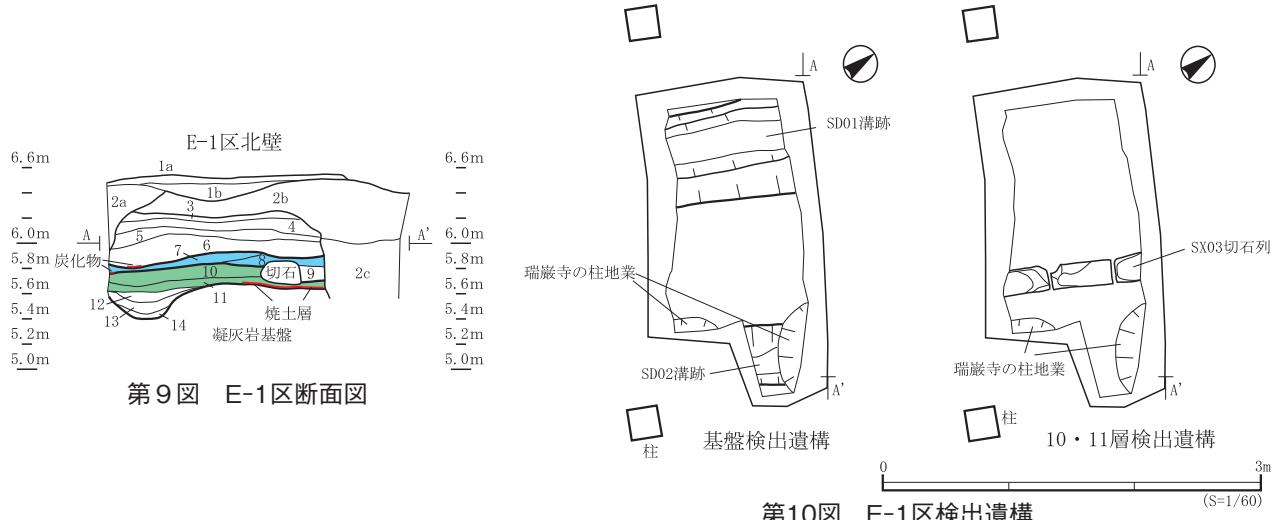
小口面の反対側（西側）は盛土されその上に角礫を敷き詰めている。したがって全体としては小口面を段として西側が約20cm高くなる基壇状の遺構となっていたと考えられる。石列の方向は現在の柱と比べ北方向で西側に若干傾く。また、切石列の東側から落ち込みが検出されているが、部分的であり詳細は不明である。8・9層は切石列を覆い、段差をなくして平坦面を作り出している。

D-2区はD-1区の東側に設定した調査区で、本堂の屋外にあたる。地表下40cm～60cmで基盤となる凝灰岩層に達し、その間12枚の層に大別された（第7図）。基盤の上面は北から南に向かって緩やかに傾斜し、標高は北側で5.8m、南側で5.6mである。遺構面は基盤の面と切石列が検出された12b層、これを埋めて作り出した平坦面8・9層上面の3面と考えられる。切石列は東側に小口面を揃え、西側は盛土と角礫で基壇状に高められている。段差は約15cmである。切石は凝灰岩、角礫は安山岩である。D-1区で検出された切石列の東側延長部分と考えられ、総延長は南北約3mになる。

[E区] 本堂南西部に位置する。側柱列の縁石を挟んで本堂内側（E-1区）と外側（E-2区）の2本のトレンチを設定した。

E-1区は本堂の上々段の間付近に設定した調査区で、現地表は基壇上面となる。約90cmで基盤となる凝灰岩層に達し、その間11枚の層に大別された（第9図）。遺構面は、基盤となる凝灰岩と10・11層上面で確認され、また7・8層上面も硬くしまっていることから、この3面と考えられる。遺構面の高さは、最下層が5.6～5.7m、10層上面が5.8m、7・8層上面が5.9mである。

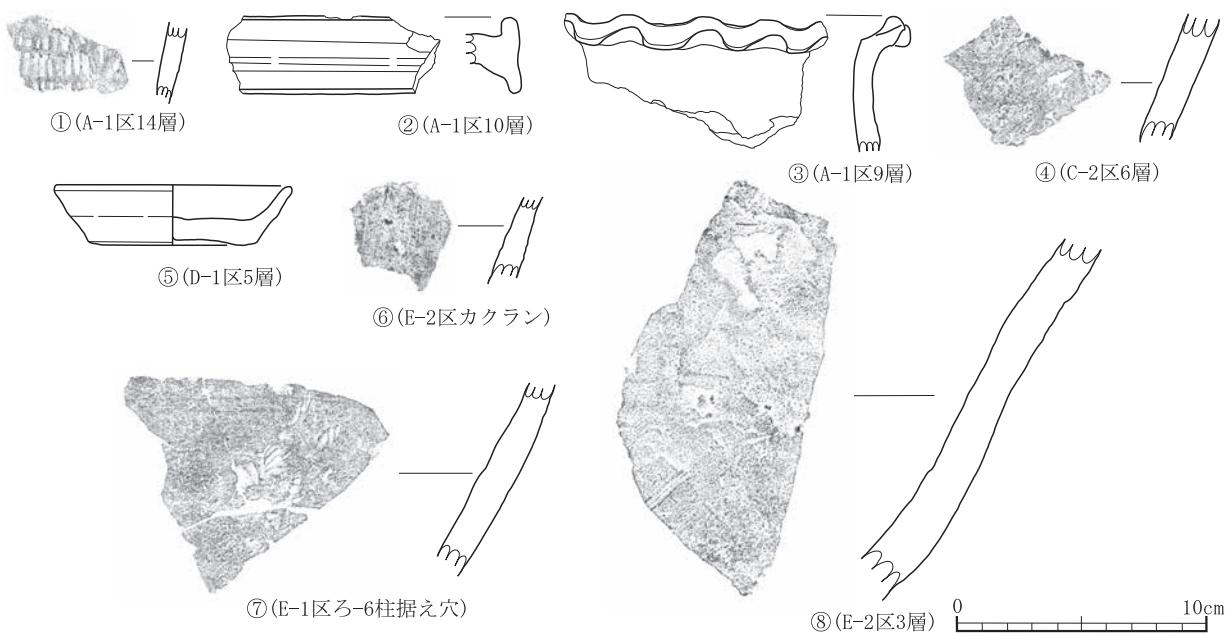
基盤から検出された遺構は平行して南北に延びる2条の溝である（第10図）。基盤の直上から溝の部分にかけては焼土層が分布しており、この時期に火災が発生したと考えられる。溝は西側のSD01が幅70cm、深さ20cmで、東側のSD02が幅50cm、深さ20cmでいずれも自然流入土で埋まっている。



両溝間の距離は中心間で約1.8m、上端の間で約1.0mある。溝の堆積土中から瓦や焼壁が出土している。SX03切石列は2条の溝が埋まった後に盛土（11層）を行い、その上面に据えられている。切石列の北側の部分は10層で覆われ、切石を挟んで南側よりも若干高くなっている。切石列は、方向が前段階で検出された溝跡とほぼ同じであり、据えられた位置が2条の溝の中心線とほぼ一致する。用材は凝灰岩で、大きさのわかるもので幅20cm、長さ50cmである。7・8層からは遺構は検出されなかつたが上面に炭化物や焼土が多く分布していることから、この面の遺構は火災に遭っている可能性がある。

E-2区はE-1区の西側の本堂屋外にあり、瑞巌寺の側柱に平行して設定した調査区である。現表土下5～10cmで建物に平行した2列の切石列が検出された（図版2-⑤）。2列目の西側は明治以降に行われた雨落溝の工事により壊されており、さらに西側にも切石列が延びていた可能性がある。用材は凝灰岩で、大きさは判明するもので長さ90cm、幅30cmある。近世の整地面の上に敷かれており、瑞巌寺にともなう地覆石と考えられる。なお、切石列はそのまま残し、掘り下げは行わなかった。

[出土遺物] 各時期の整地層や遺構の堆積土から土師器・須恵器・製塩土器・中世陶器・近世陶器・土師質土器・中世瓦・板碑などが出土した（第11図）。図示した9点の中で中世の整地層から出土したのは①のみで、それ以外は基礎地業や瑞巌寺に伴う整地層から出土している。



第11図 出土遺物

3.まとめ

○今回の調査で瑞巌寺以前の中世と考えられる遺構・遺構面を検出し、本堂下にも中世の遺構が存在することが明らかとなった。

○中世の遺構面は3面あり、全体では第1期（A区18層、B区17層、C区7・9層、D・E区基盤面）、第2期（A区13・14a層、B区12層、C区9・11層、D区12層、E区10・11層）、第3期（A区11層、B区9・10層、D区8・9層、E区7・8層）の3期の遺構期があったものと考えられる。なお、この遺構期の中で、第1期にはE-1区の焼土層や炭化物の分布から火災が発生した可能性がある。

○E-1区では同じ場所において2条の溝→切石列という変遷をつかむことができた。平行する2条の溝は一般的には特定の地域を区画する際に見られる遺構で、今回検出された溝も同様の性格を持つものと推定される。切石列についても区画施設（堀に伴う石列）であった可能性がある。この切石列と類似する遺構に平成19年度調査の2区で検出された切石列があり、いずれも火災後に築かれたもので同時期に存在していたと考えられる。さらに、両者間の位置関係をみると前回発見された切石列の方向と今回検出された切石列の方向がほぼ直角となることから、南辺・西辺を区画する施設だった可能性がある（第12図）。

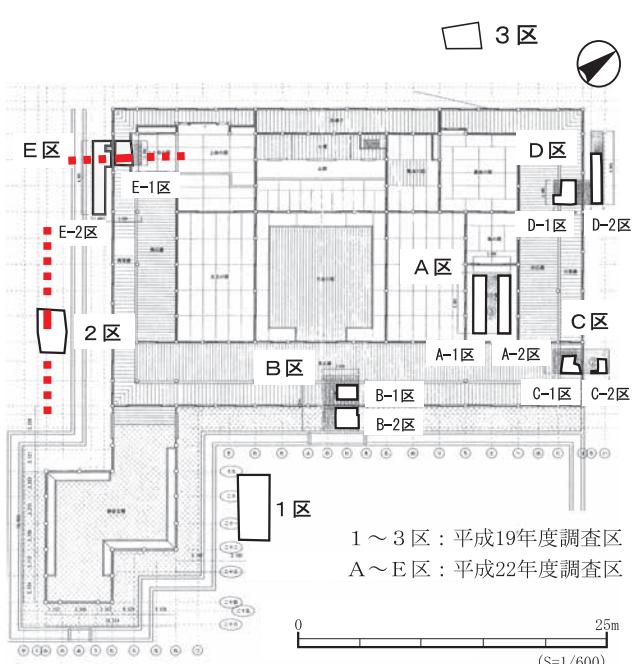
○D区の切石列は、小口面の反対側に盛土と石敷きを伴うものであり、基壇状の遺構と考えられる。

○近世の遺構としては、瑞巌寺に伴う整地層と礎石の基礎地業を確認し、A区では足場となる柱を立てた柱穴、E-2区では本堂南辺に平行する地覆石を検出した。

瑞巌寺の造成の手順は、①中世の遺構面に盛土を施す、②礎石の位置を掘り下げ基礎地業を行い、礎石を据える、③礎石間を盛土し、基壇の概形を作る、④礎石間に足場となる柱を立てる、⑤礎石に柱を立てて、屋根まで構築する、⑥足場となった柱を除去し、基壇の上面に盛土を行い硬く叩きしめる、というものであったと推定される。

引用文献

- （宗）瑞巌寺 2009 『瑞巌寺境内遺跡』
日本三景展実行委員会 2005
『特別展図録日本三景展』
宮城県教育委員会 2003 「瑞巌寺境内遺跡」
『壇の越遺跡ほか』 pp.57-71
宮城県教育委員会 2007 「雄島遺跡」
『早風遺跡ほか』 pp.63-76
宮城県教育委員会 2008 「瑞巌寺境内遺跡」
『壇の越遺跡ほか』 pp.31-38



第12図 南辺と西辺の推定線



① A-1区検出遺構（南東から）



② A区2・3層検出遺構（南東から）



③ A-2区西壁断面（南東から）



④ A-1区南・東壁断面（北から）



⑥ C-1区東壁断面（北西から）



⑤ B-2区地山検出遺構（南西から）



⑦ C-2区検出遺構（南西から）



上左：① D-1区12層検出遺構（南東から）

上右：② D-2区12層検出遺構（南東から）

下右：③ D-1区西壁断面（南東から）



上左：④ E-1区地山および10・11層検出遺構（南西から）

上右：⑤ E-2区検出遺構（北西から）

下右：⑥ E-1区北壁断面（南西から）





図版 3

はは こ ざわ
母 子 沢 遺 跡

調査要項

遺跡名：母子沢遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：11075 遺跡記号：T E）

所在地：宮城県塩竈市母子沢町

調査原因：集合住宅建築

調査主体：塩竈市教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

初鹿野博之 古田和誠

塩竈市教育委員会生涯学習課

櫻井利和 大場 明 堀江桂弘 小野寺幸樹

調査期間：平成22年8月30日・8月31日

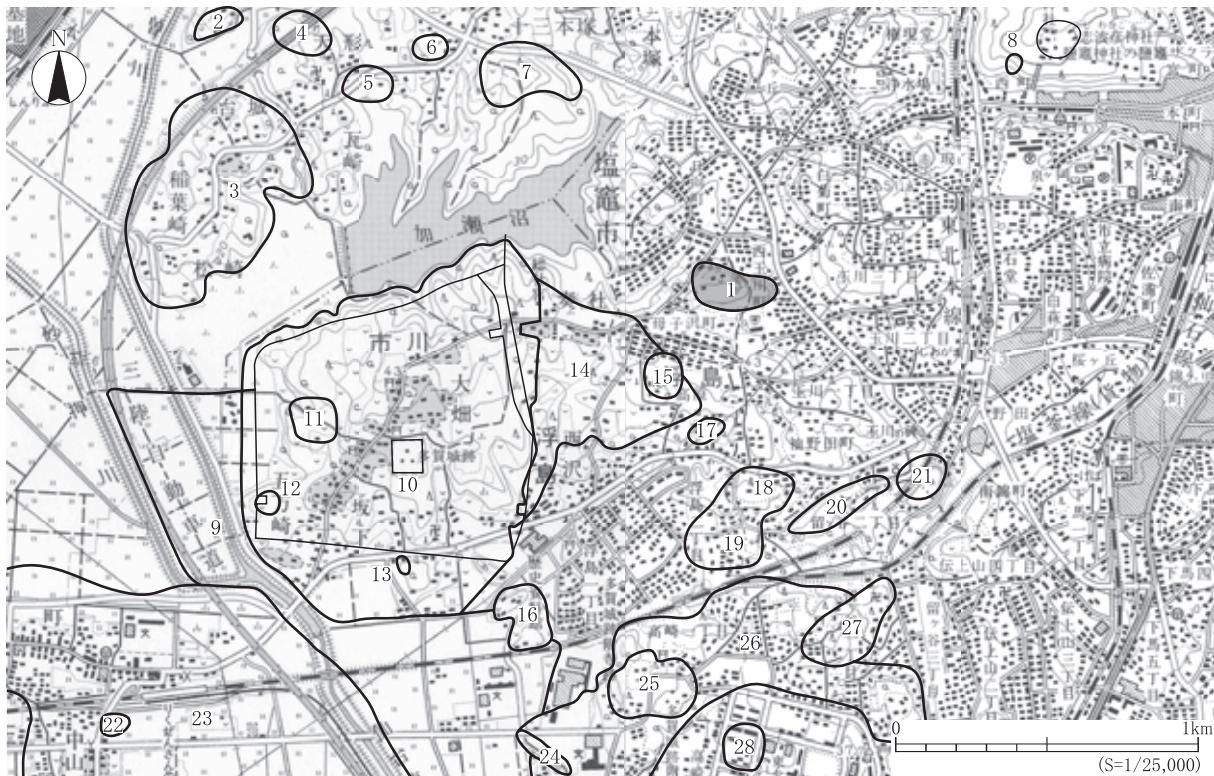
調査対象面積：約700m²

調査面積： 約130m²

1. 遺跡の概要

母子沢遺跡は宮城県塩竈市母子沢町に所在する（第1図）。鹽竈神社の南西約1.5km、陸奥国府多賀城跡東門の東約500mに位置し、多賀城市との市境に近い。本遺跡は、松島丘陵から塩竈方面に向かって派生した低丘陵上の南西部に立地し、遺跡付近の標高は45m前後である。この丘陵の西側は多賀城跡外郭東門まで連続する尾根状の地形で、同一丘陵上には多賀城市西沢遺跡、法性院遺跡などが隣接して立地している。西沢遺跡では平安時代の鍛冶工房跡を含む竪穴住居跡、掘立柱建物跡が多数発見され、国府多賀城の強い影響下にあった地区として推定されている（石本ほか1998、相澤・車田2000）。丘陵を下って北東1.5kmの鹽竈神社周辺は、古代の国府津「塩竈の津」が所在したとされる地域である。多賀城外郭東門から総社宮を通って鹽竈神社裏門に至る旧塩竈街道が今回の調査区の北側を通過しており、古代においても同様の尾根を通るルートが道路として利用されていたと推定されている。

平成12年には今回の調査地点の南側で宅地造成に係わる発掘調査が行われ（第2図）^{註)}、平安時代の竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡1棟・溝跡3条が検出されている（古川2001）。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	母子沢遺跡	丘陵	散布地	平安	15	法性院遺跡	沖積地	散布地・寺院	古代
2	北窪遺跡	丘陵麓	散布地	古代	16	(特別史跡)館前遺跡	丘陵	官衙・城館	古代・中世
3	加瀬遺跡群	丘陵・自然堤防	散布地	縄文・古代	17	高原遺跡	丘陵	散布地	古代・中世
4	天形遺跡	丘陵	散布地	古代	18	袖野田遺跡	丘陵斜面	散布地	奈良・平安
5	窪遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	19	小沢原遺跡	丘陵	散布地	古代・中世
6	山屋敷遺跡	丘陵	散布地	旧石器	20	野田遺跡	丘陵斜面	散布地・城館	古代・中世
7	加瀬貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文・古代	21	矢作ヶ館跡	丘陵	城館・散布地	古代・中世
8	塩竈神社 境内遺跡	丘陵斜面	散布地・製塙	縄文	22	山王山池田館跡	自然堤防	城館	古代・中世
9	市川橋遺跡	丘陵・自然堤防	集落・都市	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安	23	山王遺跡	自然堤防	集落・都市・屋敷・貝塚	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
10	特別史跡多賀城跡	丘陵・沖積平野	国府	奈良・平安	24	高崎古墳群	丘陵麓	円墳	古墳
11	金堀貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文	25	特別史跡多賀城廐寺跡	丘陵	寺院	奈良・平安
12	五万崎遺跡	丘陵	墓	縄文・弥生・古墳	26	高崎遺跡	丘陵	集落・都市・城館	奈良・平安・中世
13	田屋場横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳	27	留ヶ谷遺跡	丘陵	城館	古代・中世
14	西沢遺跡	丘陵	集落	古代・中世	28	御屋敷館跡	丘陵	城館	中世

第1図 母子沢遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査の概要

平成22年7月、本遺跡内で集合住宅建築に係わる工事が計画され、遺構の分布状況を確認する必要性があるため、確認調査を実施することとなった。調査対象地内（約700m²）に3本のトレント（合計約130m²）を設定し、重機で表土を除去した後に、遺構・遺物の分布を確認した。

調査の結果、深さ10~50cmで地山に達し、溝跡3条以上、井戸跡2基が検出された。集合住宅建築予定地は盛土を行い、遺構面まで掘削が及ばないことから、確認調査のみにとどめた。調査区・遺構の平面図を作成し調査を終了した。

溝跡はいずれも幅50~60cmで、丘陵の尾根筋に沿うように東西方向に延びており、遺物が出土していないため時代・性格などは不明である。井戸跡はいずれも溝跡より新しく、堆積土上部から出土した染付磁器破片から、近世～近代以降のものと考えられる。なお、井戸跡1の堆積土上部からは、軒丸瓦破片が出土した（第3図）。多賀城跡政庁第Ⅱ期に位置付けられる重圈文軒丸瓦で、型番240～242のいずれかである。厚さは3.0cmである。

本遺跡は、多賀城外郭東門から鹽竈神社裏門に至る古代の道路のルート上であると想定されたが、今回の調査では道路跡は確認できなかった。

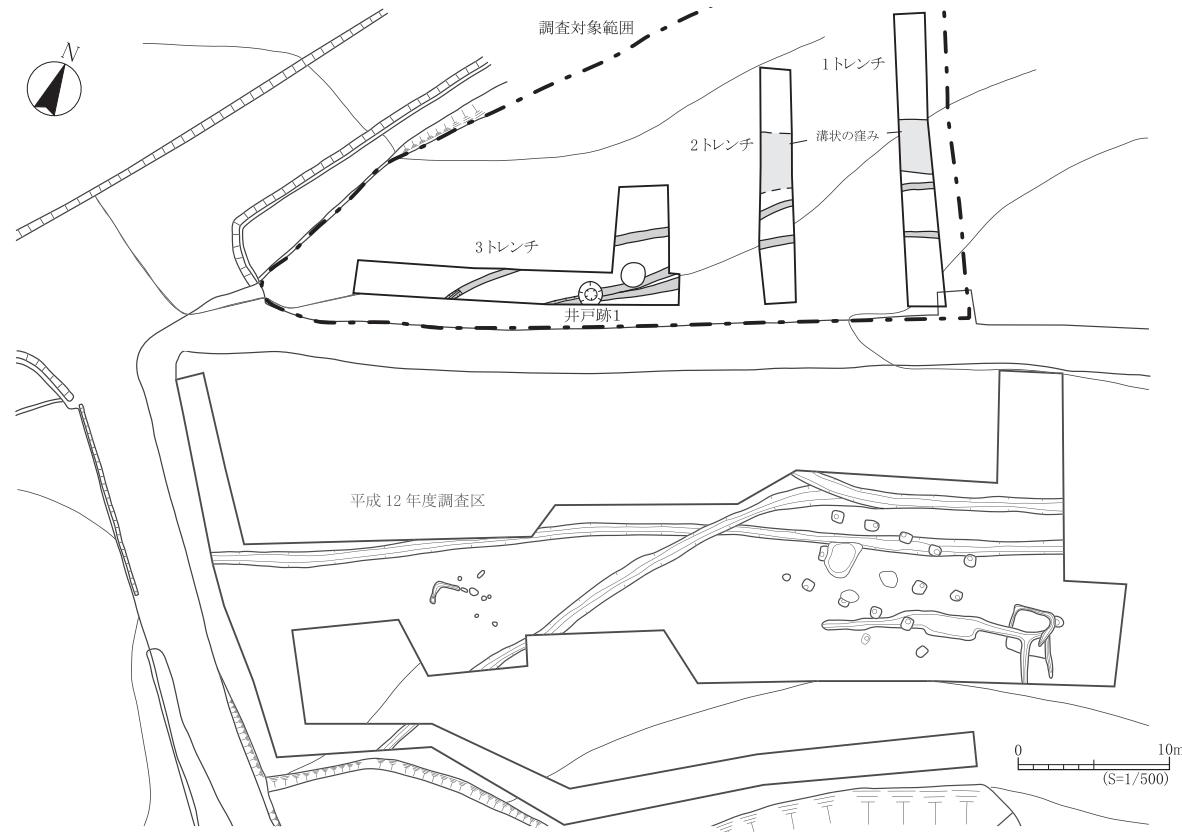
註 第2図は古川2001の第3図を再トレースし、加筆・修正したものである。

引用文献

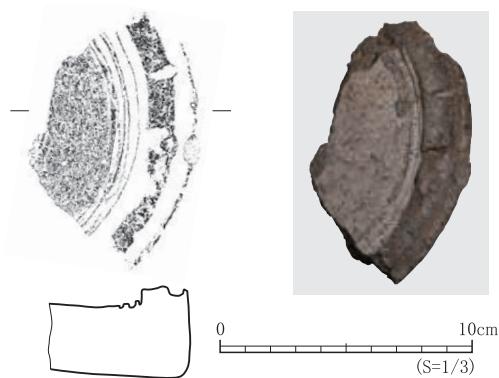
相澤清利・車田敦 2000 「西沢遺跡－第8次調査報告書－」 多賀城市文化財調査報告書第58集

石本敬ほか 1998 「西沢遺跡－第4次調査報告書－」 多賀城市文化財調査報告書第51集

古川一明 2001 「母子沢遺跡」 塩竈市文化財調査報告書第5集



第2図 調査区の位置



第3図 井戸跡1出土瓦

層	種類	型番	特徴
堆積土上部	重圏文軒丸瓦	240~242	瓦当厚3.0cm (S=1/3)



1. 調査区遠景
(西から)



2. トレンチ3遺構検出
状況 (南西から)

うらしゅく おだみねかいづか
浦宿尾田峯貝塚

うらしゅく
浦宿 C 遺跡

調査要項

遺跡名：浦宿尾田峯貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号：73001 遺跡記号：UR）

所在地：宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字浦宿尾田峯

遺跡名：浦宿C遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：73027）

所在地：宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字浦宿

調査原因：町営浦宿第1住宅建替事業

調査主体：女川町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課 菊地逸夫 佐藤貴志

調査期間：浦宿尾田峯貝塚 平成22年4月13日～4月15日

：浦宿C遺跡 平成22年11月1日～11月9日

調査面積：浦宿尾田峯貝塚 290m² 調査対象面積 1800m²

：浦宿C遺跡 563m² 調査対象面積 6925m²

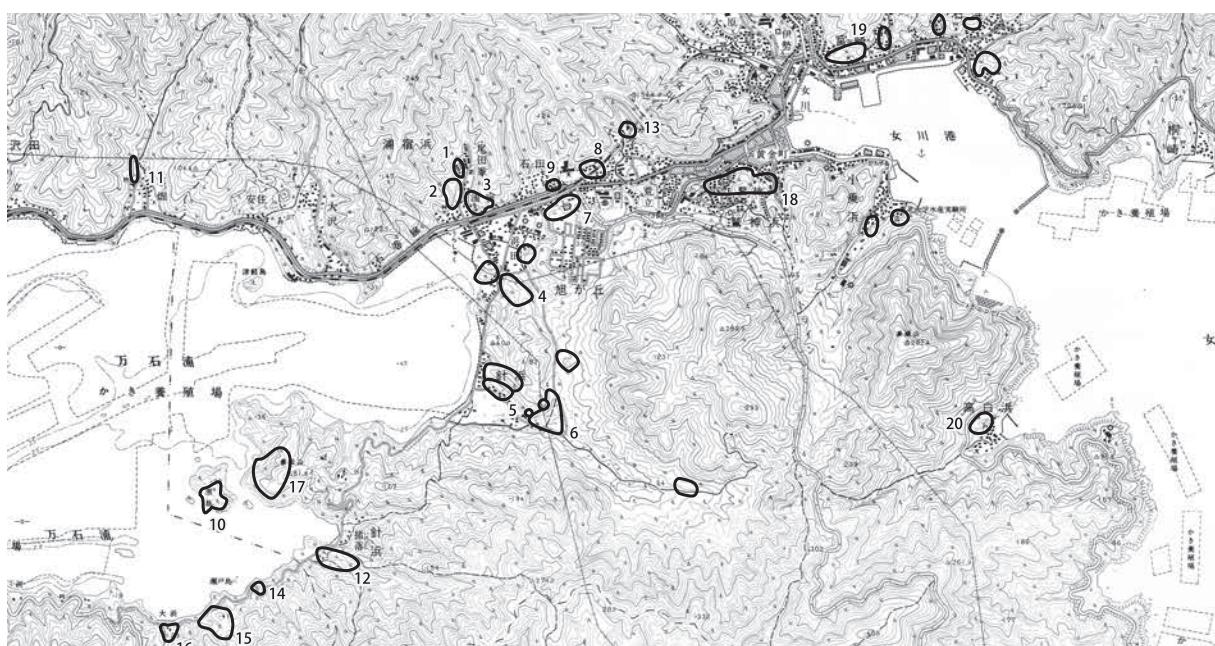
1. 遺跡の概要（第1図）

浦宿尾田峯貝塚・浦宿C遺跡は宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字浦宿に所在する。遺跡は女川町の中心部にある町役場から西に約2km離れた地点にあり、JR石巻線浦宿駅の北側約200mに位置している。

女川町は牡鹿半島の基部に位置する町で、東から女川湾が、西からは万石浦が湾入して大きく抉れるような地形となっている。万石浦は、南側を牡鹿半島、北側を北上山地から派生する丘陵地によって囲まれた内海で、東西4.5km、南北2.5kmの広さをもつ。現在は石巻市渡波付近で開口し、その幅は100mほどであるが、縄文時代には北側の丘陵地を越えた低地帯まで海が広がり、「古稻井湾」を形成していたと言われる。

万石浦の最も奥まった部分には、丘陵地を南北に開析する尾田峯沢があり、沢筋には浦宿B遺跡や浦宿尾田峯貝塚・浦宿C遺跡などの縄文時代の遺跡が営まれている。この中で浦宿尾田峯貝塚は古くから学術調査や開発に伴う調査が行われ縄文時代晚期前半の貝塚であることや大型の中空土偶を出土した事で知られている（女川町教育委員会1993）。また、浦宿B遺跡は平成17年度の店舗建設による事前調査で縄文時代前期初頭の土器類やマグロをはじめとする魚骨・獸骨が多量に発見されている（宮城県教育委員会2006）。

今回の調査は、女川町の町営住宅建設に伴う確認調査で、住宅建設予定地について、遺構・遺物包含層の有無やそれらの面までの深さの把握を目的として行った。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	浦宿C遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文後	11	志畑遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中
2	浦宿尾田峯貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文後・晩	12	猪落遺跡	丘陵麓	散布地	旧石器・縄文前・中
3	浦宿B遺跡	丘陵斜面	貝塚	縄文前・中・後・晩・古代	13	照源寺境内遺跡	丘陵	散布地	古代・近世
4	尾浦貝塚	丘陵	貝塚	縄文前・中・後・古代	14	青木浜遺跡	丘陵麓	貝塚	奈良・平安(製塙)
5	針ノ浜墓地下遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中・後・古代	15	屋敷浜貝塚	丘陵	貝塚	縄文前・中・後・晩・古代(製塙)
6	花坂遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・古代	16	大浜遺跡	丘陵麓	貝塚	古代・近世(製塙)
7	十二神遺跡	丘陵麓	散布地	縄文前	17	唐松山下貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文前・晩・弥生・古代
8	門前ガード脇遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中	18	内山遺跡	丘陵	散布地	縄文中・後・晩・古代
9	門前一小前遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	19	宮ヶ先遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中・後・晩・弥生・古代
10	黒島貝塚	島嶼	散布地	縄文晩・弥生・古墳・古代	20	高白浜遺跡	丘陵	散布地	縄文前・後・古代

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査の概要

[浦宿尾田峯貝塚] (第2図)

調査対象となったのは暫定住居建設予定地の約1800m²で、調査区の地形に合わせて東西方向に6m間隔で幅3mのトレンチを6本設定して遺構・遺物の検出を行った。

調査区の現状は資材置き場として利用されており、これを造成する際に東西に伸びる尾根を削平し、その土砂を南北両側に振り分けて盛土して平坦面を作り出していることから現地形は大きく損なわれていた。

なお、調査は対象地内が全面盛土されること、暫定住居の基礎が1mを越えないことから、これ以上の深度の部分については調査を行わなかった。

T1は長さ約16mある。尾根の南側斜面にあたり、大きく盛土(1層50cm~150cm)が施されていた。2層は旧耕作土(5cm~20cm)、3層は黒色土層(10cm~25cm)でその下は基盤となる岩盤が風化した地山となっている。3層はトレンチ全域に広がり、層中から縄文時代晚期の土器片が散発的に出土している。この層は調査区のさらに東側に延びると考えられるが、3層の確認面の深さが東端では地表面から150cmにも達し、さらに深くなることからここで調査を打ち切った。

T2は長さ約25mある。尾根の中央から南側斜面にあたり、西端部は削平を受け、一方東側は盛土が施されている。トレンチの東側3分の2の範囲に3層が分布しており、この部分の地山面からは径20~40cmの円形のピットが多数検出されている。

T3は長さ約21mある。尾根のほぼ中央部にあたり西端から約15mの地点まで削平を受けている。東端に3層が分布するが、遺構は検出されなかった。

T4は長さ約17mある。尾根の北側斜面にあたり西端部は削平を受け、一方東側は盛土が施されている。表土下80~100cmで3層に対応する黒色土層が現れるが、遺物はほとんど認められない。

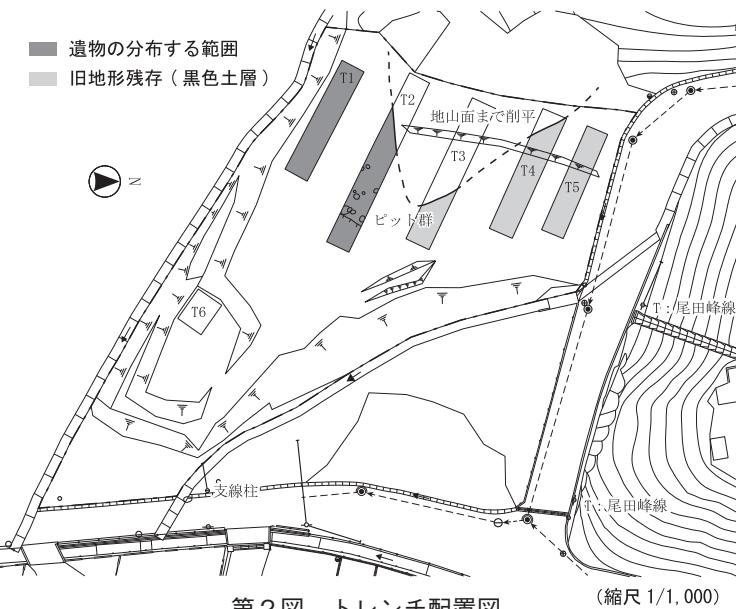
T5は長さ約15mある。尾根の北側斜面にあたり、大きく盛土が施されている。表土下75~100cmで3層に対応する黒色土層が現れるが、遺物はほとんど認められない。

T6は長さ約5mあり、調査区の南東隅の一段下の平坦地に位置する。厚く盛土が施されており、約2mの深度まで掘り進め旧耕作土面を検出した。

出土した遺物は平箱1箱分で、ほとんどがT1の3層から出土したものである。縄文晚期前葉から後葉のもので、①~⑩は大洞B式、⑪は大洞BC式、⑫~⑭は大洞C2式のものと考えられる(図版1)。

[浦宿C遺跡] (第3図)

調査対象となったのは浦宿第1住宅の建設予定地となる6925m²で、調査区の形状に合わせて東西方向のトレンチを10~20m間隔で合計16本設定して遺構・遺物の検出を行った。



第2図 トレンチ配置図

(縮尺 1/1,000)

調査区内の地形は東側を南北に流れる尾田峯沢の西側に面した緩やかな斜面であったが、当該地に建てられていた町営住宅を造成する際に斜面の西側を削平し、東側に盛土して平坦面を造り出しており、旧地形を留めている部分は少ない。

調査の結果、T1～T3、T10付近ではかろうじて旧地形が保たれているものの、T4～T9及びT11～T14の範囲では調査区の西側の大部分が地山面まで削平を受け、現地表面ですでに基盤となる風化した岩盤が露出しており、旧地形はトレンチ東隅の沢筋の部分にわずかに残存する事がわかった。

T1は調査区の最南端に位置するトレンチで、大きく盛土が施されていた。1層は盛土（80～130cm）、2層が旧耕作土（約20cm）、3層（5～10cm）が黒色土層でその下は基盤となる岩盤が風化した地山となっている。3層は西半に広がりその部分から縄文土器が少量出土している。

T2は表土下約70cmで3層（厚さ10～20cm）が検出された。3層はトレンチ全体に広がり、西半の部分から遺物が比較的まとまって出土している。遺物には縄文土器・石器（磨製石斧3点）、獸骨・魚骨（判明するものとしてはシカ・イノシシ・イルカ・マグロ）がある。

T3では表土下40cmで3層が検出された。3層はトレンチ全域に広がるが、遺物はT2に比べ非常に少なく西側の部分で散発的に含まれる程度である。

以下、T4以北のトレンチでは、調査区の東側～東端で3層の分布が認められたが、遺物（土器）は全体でも数点出土したのみである。

出土した遺物は平箱2箱分で、ほとんどがT2・T3の3層から出土したものである。①は、摩滅が著しいが斜縄文を施した土器で、胎土に纖維を含む。縄文前期初頭頃のものと考えられる。②～④（T3出土）は沈線による区画の中に羽状縄文を施したもので縄文後期中頃、⑤～⑨（T2出土）は磨消縄文や沈線などで描かれた文様に粘土粒や突起を貼付したもので後期末頃のものと考えられる（図版2）。

3.まとめ

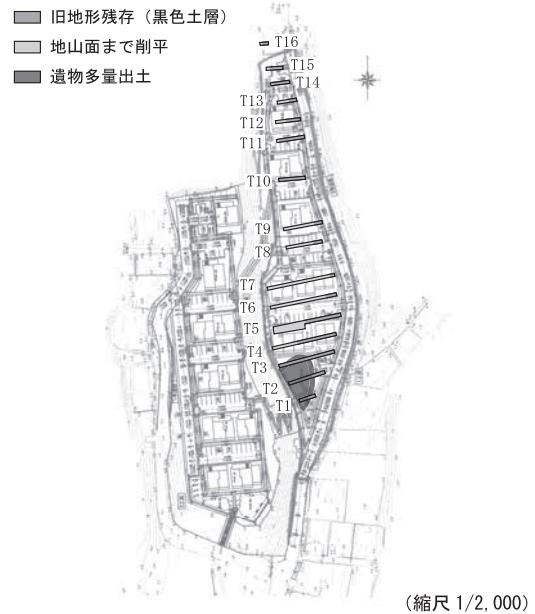
○浦宿尾田峯貝塚では、調査区中央を東西に延びる尾根の南側斜面（T1・T2）から小ピット群と遺物包含層が検出された。包含層からは縄文晩期初頭から中頃まで時期差のある土器が散発的に出土しており、二次的な堆積によるものと考えられる。

○浦宿C遺跡では、調査区の南端と東側の沢地に近い部分で旧地形が残存していた。その中でT1～T3の西側からは縄文時代後期後半を中心とする遺物包含層が検出された。包含層からは土器類の他に獸骨や魚骨なども出土している。

引用文献

女川町教育委員会 1993 『尾田峯貝塚』 女川町文化財調査報告書第1集

宮城県教育委員会 2006 「浦宿B遺跡」『東山官衙遺跡周辺地区ほか』 pp.47-84 宮城県文化財調査報告書第208集



第3図 トレンチ配置図

(縮尺 1/2,000)



調査前状況（北東から）



T3～5の調査状況（西から）



T1確認状況（東から）



T1堆積状況（南から）



図版1 浦宿尾田峯貝塚出土遺物



調査前状況（南から）



T2堆積状況（南西から）



T2堆積状況（南から）



T6確認状況（西から）



図版2 浦宿C遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はばいせきほか							
書名	羽場遺跡ほか							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第228集							
編著者名	高橋栄一・菊地逸夫・佐藤貴志・村上裕次・古田和誠							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3685							
発行年月日	西暦2011年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
はば 羽場遺跡	かみぐんかみまち 加美郡加美町 米泉・菜切谷・ 羽場	044458	28015	38度 35分 12秒	140度 50分 54秒	2010.10.04 ～10.28 2011.01.12	53m ²	重要遺跡範 囲確認
ずいがんじけいだい 瑞巖寺境内遺跡	みやぎぐんまつしままちあざ 宮城郡松島町字 ちょうない 町内	044016	17101	38度 22分 19秒	141度 03分 36秒	2010.05.31 ～07.07	34.1m ² (61.5m ²)	国宝瑞巖寺 本堂改修工 事に伴う確 認調査
ははこざわ 母子沢遺跡	しおがましははこざわまち 塩竈市母子沢町	042030	11075	38度 18分 30秒	141度 00分 13秒	2010.08.30 ～08.31	130m ² (700m ²)	集合住宅建 設
うらしゅくおだみねかいか 浦宿尾田峯貝塚	おしかぐんおながわまち 牡鹿郡女川町 うらしゅくはまおうらしゅく 浦宿浜字浦宿 尾田峯	045811	73001	38度 26分 10秒	141度 25分 30秒	2010.04.01 ～04.15	290m ² (1800m ²)	町営浦宿第 1住宅建替 事業
うらしゅく 浦宿C遺跡	おしかぐんおながわまち 牡鹿郡女川町 うらしゅくはまおうらしゅく 浦宿浜字浦宿	045811	73027	38度 26分 16秒	141度 25分 32秒	2010.11.01 ～11.09	563m ² (6900m ²)	町営浦宿第 1住宅建替 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
羽場遺跡	官衙関連遺跡・ 集落跡	縄文・弥生・古墳・ 奈良・平安	土壙跡・堀跡	縄文土器・須恵器		城生柵跡の外郭区画施設 の確認		
瑞巖寺境内遺跡	製塙・寺院跡・ 散布地	縄文・奈良・平安・ 中世・近世	切石列・溝跡・ 土坑・柱穴・ピット	縄文土器・土師器・須恵器・ 製塙土器・中世陶器・ 青磁・瓦・板碑		本堂下で中世の遺構を確認、 瑞巒寺建設に関わる整地層や 足場と考えられる柱穴を検出		
母子沢遺跡	散布地	平安	溝跡・井戸跡	瓦・磁器				
浦宿尾田峯貝塚	貝塚	縄文	ピット、 遺物包含層	縄文土器・石器		縄文時代晚期前半の遺物 包含層		
浦宿C遺跡	散布地	縄文	遺物包含層	縄文土器・石器・獸骨・魚骨		縄文時代後期後半を中心 とする遺物包含層		
要約	羽場遺跡では、城生柵跡の北西隅から830m北西に位置するD地点の土壙状の高まりと堀状のくぼみの調査を行い、これらが古代の土壙跡と堀跡であることを確認した。ここから、これまで確認されている土壙状の高まりと堀状のくぼみも同様の構造と考えられる。これらはその位置関係から城生柵跡の外郭区画施設跡と考えられ、城生柵跡も大崎平野北縁に分布する他の城柵・官衙遺跡と同様、三重構造となることが明らかとなった。							
	瑞巒寺境内遺跡では、本堂下の確認調査を行い、中世と考えられる遺構・遺構面を検出した。中世の遺構面は最大で3面認められた。検出した遺構は切石列、切石遺構、土坑、ピットである。切石列については、平成19年度調査で検出した切石列と一連のものの可能性がある。また、近世瑞巒寺に伴う整地層と礎石の基礎地業、屋根を架構する際の足場と考えられる柱の柱穴などを検出した。							
	母子沢遺跡では、近世以降の井戸跡と時期不明の溝跡が検出された。調査区は、多賀城跡東門から総社宮を通り鹽竈神社裏門に至る旧塩竈街道に近接し、古代においても同様の道路があったと推定されている位置にあるが、今回の調査では関連する遺構は確認できなかった。							
	浦宿尾田峯貝塚では、調査区中央を東西に延びる尾根の南側斜面から小ピット群と遺物包含層が検出された。遺物包含層からは縄文晚期初頭から中頃の時期差のある土器が散発的に出土した。							
	浦宿C遺跡では、旧地形が残存していた調査区の南端で縄文時代後期後半を中心とする遺物包含層が検出された。遺物包含層からは土器類の他に獸骨や魚骨なども出土している。							

宮城県文化財調査報告書第228集

羽場遺跡 ほか

平成23年5月25日印刷
平成23年5月31日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
